
魔皇伝

もす

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔皇伝

【Nコード】

N6997H

【作者名】

もす

【あらすじ】

目が覚めたら、そこは異世界だった。そう、青年は最大級の迷子になっていたのだ。そしてその世界は、やがて大きな変動期を迎えていく。青年を中心として。初投稿になります。主人公最強設定の異世界ファンタジーです。

序章 異界からの手招き

気がつくと青年は、緑の草原の上で寝転がっていた。
何とも言えない清々^{すがすが}しい風が肌をくすぐっていく。

ああ、これは夢だ。

自分の生きている世界はこんなところではない。

暗雲の下、薄暗い時間が延々と続くだけの世界。

荒れ果てた荒野、干からびた大地。吹き荒れる風は生き物の腐った臭^{まみ}いに塗れている。

それに比べてここは、何と美しい世界だろう。

水も空気も大地も、すべてが澄^すんでいる。

このまま、この世界にいられたらどんなにいいだろう。

だがそんなことは願うだけ無駄。

なぜならこれは夢なのだから。

それならせめて、覚めてくれるな。

もう少し、もう少しだけ、この世界を感じていたい。

そう願って、青年は静かに目を閉じた。

少女は追っ手を振り切ろうと、あらん限りの力で走っていた。

右手には、すでに抜刀された剣を握っている。

年の頃は十代の後半。身形^{みなり}からして旅の剣士のようなのである。しかし、その冷やかな美貌と流れるような金髪は、どこぞの貴族の令嬢を思わせる。

決して戦いに身を投じるようには見えないが、その剣は意外にもしつくりと少女に馴染んでいた。相当の修練を積まなければこうは

ならない。

と、少女は振り向きざまに剣を一閃させた。キーン、と鋭い音が響き、銀色に光る何かが地に落ちた。

短剣だった。驚くべき剣の冴^さえだが、少女の反応が一瞬でも遅れれば、短剣は間違いなく少女の背に深々と突き刺さっていただろう。防がなければ致命傷を、防いだところで足止めになる。追っ手からすれば、まさに一石二鳥の攻撃。

少女とてそれがわからないわけではなかったが、避けるには体勢が悪かったのである。

「……」

少女は、再び走ろうとはしなかった。そんなことは無駄だとわかっていた。

追ってきた五人の男たちを鋭く睨む。短剣もそのうちの一人が放ったのだろう。

《この短剣、それに今の投剣術。……こいつら、殺し屋か》

少女は覚悟を決めたように息を静かに吐くと、剣を正眼^{せいがん}に構えた。男たちもまた、無言で剣を構えた。どうやらこの男たちも相当の手^て練である。

男たちは左右にばらけながら、ゆっくりと間合いを詰め始めた。少女の技量がいかに優れていようが、五対一では話は別である。文句なく負ける。一对一の状況を作り出そうにも、こう広くてはそれできない。

まさに絶体絶命。

《ここが、私の最期となるか……》

そのとき、だった。

まさに少女のすぐ隣に、何かがどさつと落ちてきた。それも、かなり大きな何かが。

少女はもちろんのこと、男たちも全員、落ちてきた何かを凝視した。

「なっ」

少女は驚きの声を発していた。

いつの間にか、銀髪の青年が仰向けで大の字になっているではないか。しかもかなりの美形であるが、そんなことは今は瑣末な^{さまつ}こと。少女も男たちもそんなことより、ある疑問を共有していた。

《どこから、落ちてきたんだ？》

辺りは見晴らしのよい草原。街道から遠く離れているため人気もない。上には空があるだけである。どこから落ちてきたなら、もといった場所があるはずだが、そんなものは見当たらない。

しかし、この青年が誰でどこから落ちてきたにしろ、この間^まは少女にとって千載一遇の好機だった。

少女は反射的に動いていた。

向かって右側にいる男との間合いを一瞬で詰めると、瞬く間に切り伏せる。男は糸が切れたように崩れ落ちた。

「貴様！」

我に返った四人が、少女を斬り殺そうと一斉に迫った。

《くっ、ここまでか。志半ばで逝くことになるうとは……無念だ》

少女が死を覚悟した瞬間、その声は聞こえた。

「うるせえなあ」

男たちはまたもや、足を止めた。いやとめざるを得なかった。今度は先ほどのように驚いたからではない。その声に宿る妙な威圧^{いあつ}に気圧^{けお}されたからである。

全員の視線が集中する中、声を発した本人は、ゆっくりと身を起こした。

一章 落ちてきた青年

「まったく、誰だ起こしやがったのは？　せつかくいい夢を見て……
ああ？！」

身を起こした青年が頓狂な声とんきやうを発したのも無理はない。彼の目に飛び込んできたのは、まさに夢で見ていた草原そのものだったのだ。

「まじかよ……」

いやそれだけではない。上を見上げれば、吸い込まれそうな青空が広がっている。そして鼻腔びこうをくすぐっているのは、紛れもなく草の匂い。腐敗ふはいした死の臭いなどではなく、活力みなぎが漲る生命のにおいだ。

「どうなってるんだ？　よくわからんが現実になりやがった」

違う。明らかに違う。青年とて己が生きていた世界のすべてを知っているわけではない。しかしそれでも断言できる。ここは自分がいた世界ではない、と。

まず明るさが違う。そしてにおいが違う。生と死、光と闇。ここはまさに正反対の世界。

《違う次元の世界、か？》

しかしいくら考えようと、今ここで答えが出るとは思えない。

「まあ、後でゆっくり考えるか。それより今は、お前らだな」

青年は男たちを、そして少女を静かに見渡した。全員、蛇に睨まれた蛙のように微動だにしない。今は動いてはならん、と本能が告げているのだ。

「俺がいた世界じゃ、俺の眠りを妨げることは重罪でな。ああ、女は別だが」

少女は、このときほどほっとしたことはないと後に語るのだが、それはまた別のお話。

「しかしまあ、女一人に五人がかりとはな」

青年はすつと立ち上がり、

「おい小娘、お前の知り合いか？」

「こっ？！ あ、いえ、というかそんなことより、早くお逃げください！」

我に返った少女は叫んだ。

いきなり降ってきた正体不明の青年だが、ここにおいては確実に殺される。殺し屋たちが狙っているのは自分一人なのだ。偶然居合いあわせただけの他人を巻き込むわけにはいかない。現状を作り出した原因は自分にあるのだから。

「早く！」

「そうはせん」

四人のうち二人が青年に、残る二人は少女に迫った。

武器も何も所持していない青年だ。一瞬のうちに斬り殺されるだ

ろう。

「よせ！ 狙いは私だろう！」

少女は青年の前に進み出た。

身体を張って盾になろうとしたのだ。

これで何かが解決したわけではない。むしろ状況は悪化したかもしれない。しかし、今の自分にできることがこれしか思いつかなかったのだ。

《少しでも、時間を稼がなければ》

青年はというと、少々驚いたような目で少女を見ていた。が、やがてさも面白そうに、にかつと笑った。

「お前、気に入ったぜ」

途端、少女は左手をがしつと掴まれ、後ろに引つ張られた。いきなりのことに少女は対応できず、尻餅しりもちをついてしまう。

「な、何を！」

見上げた先には、青年の背中があつた。まるで自分を守るがごとく、静かに立ちはだかっている。

その姿は何とも壮大で、少女は神にでも守られているかのような、深い安心感に包まれた。

《な、何だ、この安堵感あんどは……》

少女は、青年に一斉に斬りかかる男たちを、半ば呆然としながら

見ていた。

《この者たちは何をしているんだ？ まさか、勝てるとも思っているのか？ この人に、剣が効くわけがないだろうに。なぜ、それがわからない？》

少女自身、なぜそんなことを思ったのか不思議だった。あえて言うなら、本能でわかったとしか説明のしようがない。この青年が剣や弓などの武器で倒れるところなど、想像できないのだ。

「死ねえ！」

そのとき、少女には見えなかったが、青年の紅の双眸が、静かに冥く沈んでいった。

「愚か者が。自分たちが何に挑んだのか、その身を以って知るがいい」

青年は左手を軽く振り払った。蠅を払うような仕草だ。しかしその仕草は信じ難いほどの風圧を生み出し、男四人を大きく吹き飛ばした。

「ぐああ！」

激しく地面に叩きつけられる男たち。が、苦痛の声を出したのは一人だけ。後の三人は自らの剣に急所を貫かれ、地に落ちる以前に絶命していたのだ。声もなく、何とも呆気なく。

「ば、馬鹿な……。こんな……。こんなことがっ」

男はまるで生かされたかのように生き残っていた。

「きつ、貴様、一体何者っ」

「そういうことは戦う前に聞くもんだ」

青年は男に詰め寄っていく。

「ひっ、や、やめろ！　くるな！」

男は腰が抜けたらしく、立ち上がれずにいた。それでも手と足を必死に動かし、無様に後退していく。

しかしそんな努力もむなしく、ガシッ。

「ひいいい！」

追いついた青年に胸倉を掴まれる。

「た、助けてくれ！　命だけは！」

男は涙を流しながら必死に懇願するが、青年は一笑に付した。

「お前さっき、俺に死ねと言ったと思うんだが、俺の気のせいかな？」

「ん？　どうなんだ？　と青年はにこにこした顔で尋ねた。その笑みが何だかとても恐ろしい。

「し、仕方なかったんだ！　女を始末しろとの命令を受けた以上、目撃者も当然始末しなければならぬ！」

「誰に頼まれた？」

「知らん。俺たちは知らされていない」

「ふん、まあそうだろうな」

青年はくりと身を翻した。^{ひるがえ}もう用はないと言わんばかりに、男に背を向けて少女のもとへ歩いていく。

「た、助けてくれるのか!？」

「俺はな、今までに俺を殺そうとしてきた奴は全員、確実に殺してきた。それはこれから変わることはねえ」

青年は振り返ることなく言った。

「お前が今生きてるのは、お前の剣にだけ殺気がなかったからだ。さもなくばお前もそこで死んでる連中同様、自分の武器に殺されてただろうな」

お前に人は殺せねえよ。

そう言われた気がした。

確かに自分は、今回の任務が初仕事だった。今までに魔物は数多く倒してきたとはいえ、実際に人を斬ったことはなかった。

「……」

一瞬ですべてを見透かされた。
もはや何も言い返せなかった。
男はすくすく、その場を後にしたのだった。

「あ、あの」

少女が声をかけてきた。

「ん？」

「危ないところを助けていただき感謝いたします。私はセリアシュリン・ストラディウス・レイザードと申します」

そう言って少女ははっとした。本名を名乗ってしまったのだ。今はなるべく伏せておかなければならなかったのを忘れていた。もし青年がこの名前を知っていたなら……。

「長いなおい。呼びにくいからセリアでいいか？」

どうやら杞憂^{きゆう}だったようだ。

「あ、はい、構いません」

「俺は、そうだな、色々呼ばれ方はあるんだが。……名前、か。そういやもう長いこと名前で呼ばれたことねえな」

「え？ それはどういう」

「おーいやいや、こつちの話よ。ああ名前な、ルイだ。俺が一番気に入ってる名前」

一番？ とセリアは疑問を抱^{いだ}いたが、追求はしなかった。名前を使い分けている人間などいくらでもいる。この青年もその類なのだろう。

「ルイ殿、助けていただいたお礼をしたいのですが」

「そんなものはいらん。俺はやりたいうようにやっただけだ。現^{げん}に一人逃げ帰ってる。お前にとっちゃ、むしろ好ましくない状況かもしれない」

「しかし……」

ただの恩ではない。命の恩なのだ。気にするなと言われて、はいそうですかと納得するわけにはいかない。

「あーまあどうしてもっていうなら、一つ聞きたいことがある」

「はい、私に答えられることでしたら」

青年は周囲を見渡し、空を見上げ、そしてまたセリアに視線を戻して言った。

「ここはどこだ？」

二章 街道二人旅

アルカルズ大陸には、大小様々な国が存在する。

その中でも特に、北のベルガ帝国、南のローランド王国、そして東のサイリア大聖国の三国は、アルカルズ三大大国と呼ばれるほどの列強であった。

民族も宗教も違うその三国は、当然のことながら仲が悪く、隙あらば他の二国を滅ぼして大陸の覇権を握ろうと、虎視眈々こしたんたんと機会をうかがっていた。

この三国のいがみ合いに巻き込まれて、数多くの小国が滅んでいった。ラトラス、セルニア、ゲルト、ローデンバーグ。まだまだ挙げばきりが無い。

小国が生き残るためには、これら三国のいずれかの配下に下るか、小国同士で手を結ぶことの二つしか道はない。しかし手を結ぶといっても、今の時代、絶対に信頼できる国など存在しない。

大国の配下となり屈辱に耐えるか、いつ裏切られるかという不安に怯えるか。

そのどちらも選べない国は、滅んでいくしかない。

この世界は、そういう時代にあった。

太陽が傾き始めていた。日が暮れるまでにはまだ時間があるが、街道を往来する人々は、やや足を速めていた。

夜になってしまえば、街道といえど危険度は遥かに増す。魔物や野党の類にでも出くわせば、唯人ならまず生きて帰れない。

しかし、にもかかわらずその二人は、逆にのんびりとしたペース

で歩いていた。

もちろん、青年とセリアである。

「ふうん、なるほどねえ。俺には他人事としか見れねえが、この世界はこの世界でややこしいことになってるんだな」

「ええ。それでその、ルイ殿は別の世界からこられたということですが」

「ん、ルイでかまわねえよ。この名前に敬称はつけられたくないんでな」

普通の人間なら、その言葉には首をかしげたかもしれない。敬称をつけなければ失礼に値するのでは？ 疑問に思う者も多いだろう。しかしセリアには、その言葉が持つ意味がよくわかった。いや、セリアだからこそわかったと言い換えるべきだろう。

「わかりました」

青年は隣を歩くセリアを見やった。一言も聞き返すことなく素直に納得したのが少し不思議だったのだ。

「どうしました？」

しかしその疑問は、すぐに晴れた。

「いや、何でもねえよ」

そう言って青年は、視線を前に戻した。

《そうかこいつも、俺と同じなのか》

「それで、何が聞きたかったんだ？」

「あ、はい。その、ルイは別の世界からこられたということですが、どのような理由でこられたのですか？」

青年は再びセリアに目を向けた。

《こいつ、俺が別の世界からきたってことは疑わないんだな。普通は馬鹿げた話だろうに》

つい今し方のことだ。

自分は違う世界からきて史上最大の迷子になっていると話したら、
「頭でも打たれましたか？」と返ってくるかと思いきや、意外にも
「そうなんですか」と返ってきた。

《この世界じゃ、誰かが異世界からくるってのは珍しくないのか？》

するとセリアは少し慌てたように、

「す、すみません。聞いてはいけないことでしたか？」

「ん？ ああ、いや、ちょっと考え事をな。えーっと、俺がこの世界にきた理由だったな……。残念だが、そいつは俺にもわからねえな。目が覚めたらこの世界だったんだ」

「つまり、自分の意思ではないと？」

「ああ、俺の意思じゃねえな。仮にそうだとしても、違う世界に渡る術なんざ見当もつかん。よって帰り方もわからん。超弩級の迷子ってやつだ」

そう言いながらも青年は、自分の置かれたこの状況に楽しみを見出していた。

しかしセリアは、何と不憫な、といった表情を浮かべ、

「私に、何か手伝えることがあればいいのですが」

と言いつつも、セリアは心のどこかで、

《この人がいてくれるなら、あるいは……》

青年は三度、セリアを見やった。ただ今までとは違い、その目には悪戯っ子のような光が宿っていた。

「それはお前の本心か？」

「え……？」

セリアは明らかに動揺の声を発し、思わず足を止めていた。青年もそれに倣^{なら}って止まる。

「手伝ってほしいのは、むしろお前の方じゃないのか？」

凶星だろ？

その何とも無邪気な光を湛^{たた}えた目がそう言っていた。

「どうして……」

セリアは、すべてを見透かされているような感覚に陥りながらも、何とか言葉を紡いだ。

「どうして、そう思うのです？」

「真昼間に、五人もの刺客に狙われる女なんざ普通じゃねえ。どこに誰にどんな理由で狙われているのかは知らんが、お前、相当やばい

状況にあるんだろ？」

「……」

何も言い返せなかった。

ただうなずくことしかできなかった。

「……仰る通りです」
おつしや

「俺と一緒にいれば、確かに俺の力は利用できるだろう。でもな、それじゃあお前、俺が面白くないだろうが」

「……はい」

セリアはしゅんとなつてうつむいていた。

手伝うという口実で、実は青年の力を利用できないだろうかという思惑があつたことは認めざるを得ない。

「わかったら素直に手伝ってくれと言え」

「で、ですが、あなたを巻き込むわけには」

「あーもうめんどくさいやつだな。お前はそんなこと気にしないでいいんだよ。手伝ってほしいんだろ？ 手伝うからな？ いいな？ わかったな？」

「は、はい」

「よし決まりだ」

青年は半ば強引に取り決めると、意気揚々と歩き出したのだった。
いんげん

三章 セリアの目的

「そっいや、腹が減ったな」

青年は思い出したように言った。隣を歩くセリアは、人間らしさが滲み出たその発言にくすりと笑みをこぼした。

街道を歩く二人を、夕陽が紅く染め上げている。東の空はすでに薄暗く、風もやや冷たくなり始めていた。幾ばくもしないうちに日は沈み、辺りに闇の帳が下りるだろう。

道行く人も、先ほどからほとんど見かけない。

「もう少し西へ行くとルナンという町がありますから、そこで食事にししょう」

「おう」

しかし次の瞬間、青年ははっとして足を止めた。いきなりのこと、セリアも何事かと思って立ち止まる。

「金がねえ」

危つく吹き出しそうになったセリアである。

「くそつ、少しぐらい持つておけばよかった……って駄目か。俺がいた世界の金がここで使えるわけないよな」

ふうむ、と考え込み始めた青年である。

セリアは笑いを堪え、目尻を緩ませながら言う。

「ルイ、お金なら私が払いますから。」

「今日はそれでいいとしてもだ。これから先、ここで生きていくにはこの世界の金がいる。何とかして稼ぐ方法を考えないとな」

「それは……確かにそうですね」

言われて初めて、セリアは意外と大きな問題だったことを理解した。しかし危機感はまったく言っていないほどなかった。というのも、この青年ならその程度の問題は簡単に何とかしてしまいそうな気がしたのだ。

「お前はどうかやって稼いでいるんだ？」

「私ですか？ 私は傭兵が大半ですね」

「ようへい？」

「ご存知ありませんか？」

《そついやヨーとヘイっていう双子の兄弟がいたっけな……》

「んーたぶん知らねえな」

「えっと、傭兵というのはですね、依頼主クライアントから引き受けた仕事をこなして報酬をもらうんです。仕事内容は依頼主次第ですね。指定された人物の護衛をしたり、あるいは魔物や野党の討伐をしたりと、色々です」

「ふーむ、まあ要するに、金のために戦うってことだな」

身も蓋ふたもない言い方だが、大体的を射ている。

「そう言われると耳が痛いですが、その通りです」

セリアは苦笑いを浮かべながら答えた。

「金のために戦うのが悪いって言うてるわけじゃないけどな、俺はあんまりそういうのは好きじゃねえな」

恐らく、自分の力を金のために使うのが嫌いなのだ。

セリアもそれに似た感覚を覚えるときがあつた。

自分には剣才がある。傭兵ができるのもその剣才があるからだ。しかし仕事で剣を振るい、いざ報酬を受け取るとき、無性に虚しくむななるときがある。

この剣は決して、報酬ちからが欲しいためにあるのではない。

そう、思うときがある。しかしそんなことばかりを考えていては、それこそ傭兵などやっていられない。生きるためには仕方がないと、ある程度割り切らなければ。

「おっと、話し込んでる場合じゃなかったな。とりあえず金を稼ぐ方法はおいおい考えるとしてだ。今大事なことは飯だ。そのルナンって町に急ぐぞ」
「ええ」

一行は再び歩き出した。

アルカルズ暦2015年、大陸最西端にあるレイザード王国を悲劇が襲った。

有力貴族を筆頭とした反乱である。

そして、まるで計ったかのような、隣国カルファラ王国のレイザード侵攻。

反乱を起こしたレイザードの貴族たちがカルファラと手を結んでいたであろうことは、誰の目にも明らかであった。

レイザードには強力な騎士団があった。有能な魔術師も多くいた。しかし反乱によって内側から、そしてカルファラに外側から攻められ、レイザードは戦わずして崩れ落ちた。わずか幾日の出来事だった。

ルナンはそれほど大きな町ではない。むしろ田舎町である。一行がそのルナンの町に着いたときには、すでに日も暮れて辺りは闇が支配していた。そのせいだろうか、町には人の姿はほとんど見当たらない。

二人は適当に開いている店を探し、中に入った。案の定客はほとんどおらず、青年とセリアを除けば一人しかいなかった。

青年の食欲はすごかった。

肉と野菜を煮込んだシチューをはじめ、魚の塩焼きや鶏肉の唐揚げなど、次々と皿を空にしていくな。野菜スープをまるで水を飲むように飲み干したときは、さすがのセリアも呆然と眺めていた。

そして食事も終わりがけた頃、

「ルイ」

セリアは青年だけに聞こえるような声で言った。青年は、先ほどおかわりした鶏肉の唐揚げにかぶりつきながら、セリアに目を向けた。

「食べながらで結構ですので、聞いていただけますか？」
「ん」

青年は再び食事にとりかかり、セリアは小さな声で話し始めた。

「今から二年前のことです。この大陸の最西端にある二つの国が戦争をしました。その国の名前は、カルファラ王国と、レイザード王国です」

青年は再び食べるのをやめ、セリアを見やった。
ある言葉が引っかったのだ。

レイザード。

《確かこいつの名は……》

セリアシュリン・ストラディウス・レイザード。

「この二国の戦争は、史上最も早く終結したことで有名です。いいえ、もはや戦争と呼べるかどうかすら怪しいですね」
「続ける」

「発端は、レイザード王国の有力貴族が起こした反乱でした。そしてまるで狙い済ましていたかのように」

「カルファラが攻めてきたのか」

「はい。レイザードは反乱とカルファラの侵攻によって、内と外の両側から崩され、崩壊しました。わずか幾日のことです」

「……仕組まれたな」

セリアはうなずいた。

反乱を起こした貴族たちがカルファラと手を結んでいたであろう

ことは、火を見るよりも明らかである。

「王が無能だったのです」

セリアはぴしゃりと言った。

「王は……父は、権力とお金にしか興味がない人でした。先王が病で先立たれ、父が王位を継いでわずか二年。あの反乱は起こるべくして起こったのです」

「……」

「レイザードは今、カルファラの属国という形で存在しています。このルナンも実は、レイザード領に属します」

「するとお前の目的は、レイザードをカルファラから解放することか」

「その通りです」

四章 星空の下で

「場所を変えるか」

しばらくの沈黙の後、青年が発した言葉がこれだった。

これ以上は人気のないところで話した方がいい。今までの会話も、店にいる者たちに聞こえているとは思えないが、それでも万が一ということもある。

無論、セリアに異存はなかった。

町をさらに奥へ入っていくと、ひらけた場所に出る。以前は多くの商人が夜でも露店を出していたものだが、近頃は昼間でも寂れている。夜はそれこそ、静寂に満ちた無人の空間であった。

広場にはいくつかベンチがあった。近くで見るとかなり錆びている。青年はその一つに腰を下ろした。

しかしセリアは周囲を見渡しながら、

「あの、ルイ、こう暗くては何者かが近づいてもわからないのでは？」

聞き耳を立てられては場所を変えた意味がない。

「心配すんな、よく見えてる。それに、俺に気づかれずに声の聞こえる範囲まで接近するなんざ不可能だ」

そう言い切られては仕方がない。それに、青年が言うからには本当なのだろう。セリアは納得して青年の隣に座った。

しばらく沈黙が流れた。

青年はじつと、夜空に煌^{きら}く星々を見上げていた。

《すげえな。宝石が浮いてるように見えるぜ。……俺がいた世界も、雲の上はあんな風になってんのかな……？》

何から何まで違う。自分がいた世界とこの世界。

《何で、こうまで違うかね……》

もしかしたら、元々はこの世界のようだったのだろうか。
もしそうなら、何が原因であんな風になってしまったのだろう。

《……俺が考えてもわかんねえか》

青年は一頻^{ひん}り夜空を堪能した後、静かに言った。

「いくつか聞いてもいいか？」

「あ、はい。何でしょう？」

「お前、俺と最初に会ったとき、よくわからん連中に襲われてたが、何で狙われてたんだ？」

「それは、なぜと聞かれましても」

青年はさらに質問を続ける。

「あいつら、誰かに雇われたと言っていたが、心当たりは？」
「それは……」

セリアは答えに詰まった。

「傭兵とかいう仕事で怨みを買ったところで、あんな連中が狙ってくるとは思えん。お前一体、誰にどんな理由で狙われてんだ？」
「……」

再び沈黙が流れた。

セリアは動揺しながらも感嘆していた。

《この人は……本当に核心をついてくる。恐らく答えの想像もついているはず。それでも私の口から言わそうとする。……厳しい人だ》

セリアはしばらく下を向いていた。が、やがてそのまま小さく笑った。そうでもないと言葉を紡げそうになかった。

青年には見えているのだろうか。その、見る者の身を切るような切ない笑みが。

「私も、まさかあんな連中を送り込んでくるとは思ってもみませんでした。その……そこまでする人だとは……」

一呼吸置いて、セリアは続ける。

「私は五日前、王都マハランにいました。王に……父に会っていました。カルファラの属国となって二年、少しは変わっていることを期待していましたが、父は相変わらずでした。父は、今のレイザードがどういう状況にあるのかまったくわかっていません。高い税はもちろんのこと、略奪、人身売買と、カルファラは人道にすら反した行いを繰り返しています。ですからせめて、王として、すべきことをしてくれるよう進言したのです。ですがその結果……」

「殺し屋を送り込まれたのか」

セリアはうなずくことしかできなかった。両手をぎゅっと握り締

め、こみ上げてくるものを必死に堪える。

少しでも零れたら最後、とめられる自信はない。

一人ならともかく、今日初めて会った青年の傍で失態を見せるわけにはいかない。

ポン。

背中に置かれた青年の手。

それが何とも優しく、暖かくて、まるで包み込まれるようで。

「……うつく……っ、く……ひ……っ」

声とともに流れ出した熱き水は、頬を伝い、握り締めた拳に落ちる。

涙は後から後から流れ落ち、それにともない嗚咽おえつも大きくなっていく。

しかしセリアは、それでも必死に堪えようとしていた。

が。

ポン、ポン。

青年の手がいつも容易たやすく決壊させた。

セリアは泣いた。恥じらいなどかなぐり捨て、まるで子供のよう
に大声で。

実の父親に殺し屋を差し向けられたのだ。そのショックは筆舌に
尽くしがたいものがある。思えば道中、セリアはそんな素振り
はまったく見せなかった。必死に隠していたに違いない。しかしどう
やら、青年には勘付かれていたようである。

一人の少女として涙を流すセリアを、青年と満面の星空が静かに
いつまでも見守っていた。

五章 希望の朝

翌朝、青年が起き出したときには、すでに宿にセリアの姿はなかった、もしやと思い町に出てみると、案の定、広場にセリアの姿はあった。

青年が近づくと、セリアはそれに気づき、軽く一礼して微笑んだ。どこか吹っ切れたような、そんな笑みであった。

「おはようございます」

「おう」

青年は軽く手を上げた。

と、セリアはやや恥ずかしそうに頬を赤く染め、

「あの、昨日は、見苦しいところをお見せしまして」

「気にすんな。それより飯と宿、ごちそうさん」

「それこそお気になさらず」

「しかしなあ、いつまでも払ってもらうわけにはいかんしな……。

何か、金になることはないもんかね……」

ふーむ、と考え始めた青年だったが、ふと、セリアが腰に提げている剣に目を留めた。しばらくそれをじーつと見つめた後、

「その剣、見せてもらってもいいか？」

「剣、ですか？」

「おう、ちよっと思いついたことがあってな」

「わかりました。どうぞ」

「ん」

セリアから剣を受け取った青年は、全体を注意深く観察するよう
に見渡した後、徐に鞘おてもろから抜いた。

傷一つない刀身が、朝日を反射してぎらんと光る。

騎士が扱うような長剣と比べると細身で威力に欠けるが、その分
重さが軽く、非力な者でも扱いやすく作られている。

「風、火、水、雷、どれが好きだ？」

「はい？」

セリアは目を丸くして聞き返した。いきなり何を言うのかと思っ
た。

「どれが好きだ？」

「は、はあ……。えっと……風、ですね」

「ん、風ね」

すると青年は、人差し指と中指を、ゆっくりと刃の腹に滑らせた。
セリアには、いや誰の目にも、青年は刃をただなぞっただけに見え
るだろう。

しかし、青年の目にはしっかりと映っていた。己の指から溢れ出
た緑色に輝く光の粒子が、鋭く煌きうめいく刃に染み込んでいく様が。

「……ま、こんなもんだろ。これ以上は剣がもたん。……ほれ」

「あ、ありがとうございます」

とりあえず礼を言って、返された剣をまじまじと見つめるセリア。
しかし変化は見受けられない。

「地面に向けて軽く振ってみろ」

セリアは言われるまま、地面に向けて剣を振った。

「あ、ちよつと強い」

「え？」

しかし時すでに遅く、振り下ろされた剣は止まらない。

——刹那。

轟！！

爆音と衝撃が同時にきた。セリアを中心として、ぐわりと風が巻き起こった。突風のようなそれは、風塵を巻き上げながら周囲に拡散していく。

「……………」

セリアは爆心地で剣を振り下ろした体勢のまま硬直していた。

「あ……………あ……………」

口から漏れるのは意味を成さぬ言葉ばかり。

《な……………何だ、今は……………？——剣から……………剣から何かが出た……………。そ、そう……………風だ。剣から風が……………ってそんな馬鹿な……………》

セリアはゆつくりと、機械のような動きで下を見た。

刃から放たれた風によって地面は大きく抉られ、その破壊力を雄弁に物語っていた。

「は……はは……」

不気味な笑い声を上げ始めたセリア。

何やら危険な香りがする。

危ない。非常に危ない。

「おいセリア、戻ってこい戻ってこい！」

青年は慌てて、違う世界に旅立ちかけていたセリアを呼び戻した。

とりあえず一息ついたセリアは、落着きを取り戻し、今し方の現象の説明を青年から受けていた。

青年曰く、魔力カールと呼ばれる力を剣に宿したのだそう。魔力カールには風・火・水・雷の四つの属性があり、セリアは風を選択したから風の魔力が剣に宿っているという。どのような効果があるかと言えば、今体験した通りである。まる。

「魔力カールとは何です……？」

色々、とにかく色々聞きたいことはあったが、セリアはとりあえずそれを尋ねた。聞き慣れない言葉だということもあるが、その言葉が持つ響きは、魔術を嗜たしなんでいないセリアでさえ、魔道の香りを感じたのだ。

「あー、そこからだろうな。さてどう説明したものか……。ふむ…
…よし、見せてやろう。魔力^{カーラ}ってのは、まあ簡単に言えば力なんだ
が、こればかりは口で説明するより見た方が早いな」

青年は右手を軽く差し出した。セリアはそれを凝視する。

「普通は一部の例外を除いて目には映らねえ。が、濃度を高めれば
大抵見えるようになる。見てろ」

青年の手のひらが、否、その周囲の空間が歪み始めた。

まだ目には映らないが、セリアは、何かが傾注《けいちゅう》し
ているらしいことはわかった。何か、とてもないエネルギーのよ
うなものが、青年の手のひらに集っているのだ。

そして。

「あ」

ついにセリアの目に、赤く光る小さな粒子が映った。それは青年
の手のひらから、溢れるようにして次々と出現している。

「本来、魔力《カーラ》は無色透明だ。それを四つの属性のいずれ
かに変換して濃度を高めることで目に見えるようになる。風は緑、
火は赤、水は青、雷は紫ってな具合にな。後俺^{そろ}の意思が揃えば炎が
現れるってわけだ」

青年は右手に集った力を霧散^{むさん}させた。瞬き一つの間^間に手のひらか
ら魔力^{カーラ}が消える。青年の体内に戻ったのだらう。

「これは、やはり魔術ですか？」

しかし青年は眉をひそめた。

「何だそれは？ 俺がいた世界じゃ魔法って呼ばれてる」

青年は顎に手を当てて考える素振りを見せた。

「——ふうん、魔術か。もしかしたら似たような力がこの世界にもあるのかもしれないな」

そいつぁ困った、と青年。

「？」

はて、何が困ったのだろう、と疑問の表情を浮かべるセリア。

「いやな、これで商売でもしようかと思ったんだが、似たような力があるんならもうやってる奴が沢山いるだろう」

と青年。

しかしセリアは、青年とはまったく違う予感を感じていた。

「……ルイ」

「んー？」

青年は、せっかく思いついた方法だったのに、と少しがっかりしている。

「それ、商売になりますよ」

「なるにはなるだろうけどな、商売敵がいっぱいいるなんざ面倒く

「さい」

「そんなものいませんよ。ルイ、あなたにとっては当り前のことかもしれませんが、そんな芸当ができる魔術師なんか聞いたこともありません。特殊な力を備えた剣、この世界では魔剣と言いますが、あなたはそれをわずか数秒で作ってしまったのですよ？」

セリアは青年に詰め寄った。

「なります。商売になります」

「お、おう。そうか？」

「大きな町へ行きましょう。ここから北へ数日行けばシャトリナという町があります。そこでなら客も多く呼び込めます」

「それは構わねえけどな、お前はレイザード解放を第一に考えるよ？ たった二人じゃ解放はできんぞ？ 言つとくが、俺は確かに手伝うと言ったが、国を解放するのはあくまでセリア、お前だ」

するとセリアは力強くうなずいた。

「もちろんです。シャトリナにはお会いしたい方がいます。私はその方に、我が志に賛同してくれるよう呼びかけるつもりです」

一点の曇りもない目であった。

《大丈夫みてえだな》

「よっしゃ。そのシャトリナって町に行くか。お前は同志を集めに俺は金を稼ぎに。……って、俺志低いなあおい」

セリアはしばらく堪えていたが、それでも我慢できず、とうとう吹き出してしまった。青年もまた、そんなセリアにつられるように

笑い出した。

静かな朝の町に、二人の笑い声が響いていた。

六章 刺客、再び

ルナンを出て三日目の晩、青年とセリアは川べりで野宿していた。ルナンから直接シャトリナへ街道は繋がっていない。シャトリナへ行くには、一度東へ向かい、そして改めて北へ向かう必要があるところだ。

面倒くさいから真っ直ぐ突っ切るぞ。

セリアも依存はなかった。魔物と遭遇する危険性が格段に増すが、風の魔力が宿った剣と青年がいれば無問題である。むしろ自分たちに遭遇した魔物の方に同情の念を送るべきだろう。

街道沿いに行けばいくつか町があるので寝床と食料に困ることはないが、その分シャトリナへ到着するのは数日後になる。

現状はそれほど切羽詰まっているわけではないが、それでもゆっくりはしてられない。シャトリナへ到着するのが早いに越したことはないのだ。

しかし、二人が眠りについた真夜中、それは起こった。

この川は、西に大きく広がる森の傍を流れている。その間に満ちた森の中から、何者かが二人に迫りつつあった。

気配を殺し、地面の上をまるで滑るような動きで近づいてくる。物音をまったく立てない練磨された技術。

数日前セリアを襲撃した者たちとは格が違う。

普通の人間ならばたとえ枕元であっても聞こえまい。

もし聞こえるものがあるとすれば、それは獣や魔物の類。あるいは、人知を超越した存在である。

曲者たちは静止した。

タイミングを見計らっているのだろう。

やがて一人が静かに腕を上げ、小さく振り下ろした。

それを合図に、曲者たちは一斉に二人に飛びかかった。

――刹那。

白刃が光った。

「ぐあ！」

悲鳴はセリアではない。無論青年でもない。

抜き放たれた剣が生んだは不可視なる風の刃。それが、飛びかかってきた曲者の一人に命中したのだ。

凄まじい威力であつた。飛びかかってきた曲者は反対に吹き飛ばされ、大木に激突して絶命した。

「何だと！」

この女は何をした？　なぜ離れたところで振るわれた一太刀が当たるのか。

曲者全員が同じ疑問を抱いた。

疑問は判断力を鈍らせ隙を呼ぶ。もともと曲者は、二人に飛びかかったため空中にいるのである。空中ではいかなる人間だろうと身動きはとれない。そこでさらに生じた隙は致命的であつた。

「はあっ！」

セリアは剣を振り下ろした。生み出された風刃が曲者をとらえる。曲者は声もなく吹っ飛び、地面に激しく叩きつけられて動かなくな

った。

ここへきて、流石に曲者たちも我に返った。
着地するや否や、すかさず後方へ大きく飛び退り、距離をとる。
奇襲をかけたつもりが逆に待ち伏せを食らい、正体不明の技で二人
がやられた。

ありえないことだった。

とはいえ、こちらはまだ五人残っている。敵はたったの二人。依然としてこちらが優位な状況に変わりはない。

問題は、例の妙な技。どうやら間合いの外でも斬撃を食らうらしい。どのようなからくりかはわからないが、ようは太刀筋を見切れ
ばいいのである。

すでに二度見ている。見切れない速度ではない。

曲者たちは一瞬で互いに目配せした。勝負は次の一太刀の直後。
たとえ誰かが倒れようと構わず突き進み、殺^とる。

一方セリアは、何とも複雑な心境にあった。

《こんな剣^{もの}使^もつていいのだろうか？》

無論、風の刃のことである。しかし使わなければ恐らく勝てない
だろう。この曲者たちは数日前の連中より数段強い。しかもそれが
後五人もいるのだ。使わない選択肢はない。

《複雑だ……》

このようにセリアの心中は揺れ動き、まったく集中できていなか
ったのである。しかし言い換えれば、それだけ余裕があるというこ

とに他ならない。

とそこで、セリアはあることを思いついた。

《ひょっとして、私の意思で風刃のコントロールができたりはしないのだろうか？》

いいことを思いついた。これは聞いてみない手はない。

「ルイ」

しかしいつの間にか、青年はセリアの隣から姿を消していた。

「ルイ？」

どこへ行ったんだろう、と辺りを見渡すセリア。そんな隙だらけのセリアを曲者たちが見逃すはずもなく、ここだとばかりに一斉に襲いかかった。

男は少し離れたところから、我が目を疑いながら戦況を見ていた。失敗するはずはないのだ。

気配を殺し、闇に紛れて目標をターゲットしとめる。

ミスはなかった。完璧だった。

唯一にして最大の誤算は、あの女が使う妙な技。

魔術かと思えば、女が振るっているのはただの剣。断じて魔術ではない。魔術師の自分がそう言うのだから間違いはない。

では、あれは一体何だ？

混乱をきたした男は、風のように接近してきた人物に気づかなかった。

「よお」

「！」

男ははっとした。何よりここまで接近されても声がかかるまで気づかなかったことに驚いた。が、死線を何度もくぐりぬけてきた男である。内心の動揺を表に出さず、青年を鋭く睨んだ。

「お前は戦わねえのか？」

「貴様こそ、女一人に戦わせておいていいのか？」

「まあ、そういうわけにはいかねえだろうな。だから、ここにきた」
「ふっ……ほざきおるわ」

すると男は、胸の前で両手を近づけた。

始まりは、コオオオという奇妙な息吹だった。一定の間隔を保つて、二、三その呼吸が続いた。ただの深呼吸ではない。まるで魂魄こんぱくを絞り出すかのような呼気である。次いで、男は低く厳かな声を紡ぎ出した。発せられるその声は、まるで呪文のような闇の響きを孕んでいた。

《何だ、この言葉は……？》

男が紡ぐ言葉はすべて、青年には理解できないものだった。しかしなぜか、本能に訴えかけるものがあった。

《……魔力、だと？》

魔力は目には映らない。それは青年とて例外ではない。しかしその存在を感じとることはできる。男の両手の間には、間違いなく魔力の気配が集っていた。

男の両手の間を中心に、空間の歪みが生じていた。強力なエネルギーが密集しなければこうはならない。

そしてその歪みは、青年がよく知っている現象だった。

間違いない。その空間の歪みは、魔法を発動する際、高密度に集約した魔力によって歪んでいるように見える現象だ。

《……なるほどな、そういうことか》

青年は薄く笑みを浮かべた。からくりは理解できた。

《魔術か……。よくできてやがる》

そのとき、男の両手に集った魔力に変化が生じた。

青年にはすべて見えていた。それまで無色透明だった魔力が、赤く変化していくその様が。

《変換までするのか。こいつぁ見事なもんだな》

出現したのは紅の炎。周囲の闇を掻き消して燦然と輝いている。

炎はさらに自ら凝縮し、握り拳程度の炎球となった。

「食らえいっ！」

男はまさに全霊を賭す勢いで炎球を放った。炎球は火の粉を振り撒きながら、闇を切り裂いて迫りくる。

「ふん、焼け死ぬがいいわ、小僧！」

男はすでに勝ち誇った笑みを浮かべている。青年が焼け死ぬ様をすでに思い描いているのだろう。

《さて、食らっても何ともないんだが、どうするかね。このおっさん、相当頑張って作ってたみたいだしな……当たった方がいいんか？ それも面倒くさいなあおい》

男が聞いたらショックで寝込みそうなことを考えつつ、結局青年が選んだ行動は次の通りである。

「そらよ」

難なく平手打ちで跳ね返した。

「はあ？っ！　ぐああっ！」

男は自ら頑張って作り出した炎球をまともに食らい、燃え尽きた。

青年がセリアのもとへ戻ると、そちらもすでに決着がついていた。場には七つの軀が転がっている。

「ルイ」

セリアが青年を見つけ、駆け寄ってくる。その表情は、どこかすつきりしないといった風ふうがよく表れていた

《あー、まあ、そうだろうな》

青年はすぐに合点がいった。

セリアにしてみれば、自分の力で勝ったというより、剣の力で勝った感じがしたことだろう。剣士として生活してきたセリアからすれば、素直に納得できないところがあるのは当然である。

「実はお話があるのですが」

「それは後だ。とりあえずここから離れよか。話なら歩きながらでもできるだろう？」

「あ、はい」

二人は歩き出した。その姿は、すぐに闇に紛れて見えなくなった。

七章 すべきこと

セルディオス侯爵は、二年前レイザードが陥落した際、レジスタンスを組織し、カルファラに抵抗した人物の一人である。

侯爵自身、幾度となく戦場を経験した猛将であつた。武勇に優れ、知略を巡らすよりも真つ向勝負を挑むタイプの武人。普通の戦ならば、そういった武将は必ず必要となってくるものである。

戦において最も重要なことは、いかに兵の士気を高めるかに尽きる。侯爵のように自ら先頭に立つて敵陣に切り込む勇姿は、兵の士気を大いに高める効果があるのだ。またそれは他の部隊へも伝染していき、結果的に全軍の士気が向上するのである。

いかに自軍の士気を高め、相手の士気を下げるか。武将が最もしなければならぬことであり、また最も困難な作業であることに違ひはない。が、侯爵はこの駆け引きにかけては超一流の腕を持っていた。

しかし。

それはあくまで普通の戦ならではの話。双方の力が互角ではないにしろ、ある程度は戦える勢力においての場合である。

レジスタンスは、それができないからレジスタンスというのである。

つまり、真つ向から戦うだけの戦力がない。その戦法はどうしてもゲリラ的な奇襲が大半となる。

必要なのは兵の士気ではなく、慎重かつ大胆な知略なのだ。

カルファラにとって、セルディオス侯爵がレジスタンスを組織したことは、むしろ幸いと言ふべきだろう。もともと軍略には長けていない侯爵である。たちまち尻尾をつかまれ、見せしめのため処刑となつた。

それを機にレジスタンスは次々と潰されていき、その抵抗の炎が消えるまで、そう長い時間はかからなかった。

現在セルディオス家は、イリウスが当主の座を継いでいる。本来なら父親のグラムドが処刑されたときに、セルディオス家そのものも取り潰しになるはずだが、息子のイリウスが全面的にカルファラを支持するという姿勢をとったため、存続を許されているのである。

セルディオス家現当主、イリウス・セルディオスは、三十になっただけの男である。しかしその端正な顔立ちは、イリウスを実年齢より若く見せていた。二十代半ばでも十分通用するだろう。しかし幼さが見えるかと言えばそうではない。常に浮かべている柔和な笑みは、むしろ大人びたそれである。

「……」

「イリウス様」

扉の向こうから老人の声がした。

この屋敷で老人と言えば執事のネハイルしかない。先代当主グラムドの頃よりセルディオス家に仕えており、幼き頃のイリウスの教育係でもあった。

「爺か。入れ」

扉が開き、白髪の老人——ネハイルが姿を現した。一目でかなりの高齢と推察できるが、その足取りはしっかりしており、背筋もしんと伸びている。実に豊饒かくしゃくとしている。

ネハイルは静かに扉を閉めた。

「イリウス様、ライン様がお見えになっております」

「……そうか、通してくれ」
「は」

ネハイルは深々と一礼すると、部屋から出て行った。

ライン・セイムハルト。

セイムハルト伯爵家の長男にして、バルト騎士団の一個大隊を率いる隊長である。

伯爵家自体、貴族の中ではそれほど身分が高いわけではない。まだ三十という若さで隊長の位にあるのは、偏に彼の剣の腕によるものだ。

侯爵家は伯爵家よりも上位に位置する。したがってイリウスはラインよりも身分が上ということになる。しかし幼少の頃より二人は仲が良かった。それは主と家来という関係ではなく、良き友としての関係であった。

しばらくして、

「入るぜ？」

低く魅力的な声がしたかと思うと、イリウスの返事を待つことなく扉が開かれた。

遠慮なく部屋に入ってきたのは、がっしりとした体型の大男。精悍な顔立ちをしており、まさに戦場を駆け抜ける戦士といった様である。

ラインは扉を閉めると、厳重に鍵をかけた。
心なしかその表情は硬い。

「……まあ、座れ」

イリウスに促され、ラインは無言のまま椅子に腰かけた。イリウスもまた、近くにあった椅子に座る。

「……」

「……」

しばし沈黙が流れた。

それは決して心地の良い静寂ではなかった。

「……なあ」

ラインが、手元に視線を落としながら静かに口を開いた。

「いつまで待たせるつもりだ？」

ラインはイリウスを見やった。睨みつけるような目だ。しかしイリウスは、その眼光を真っ向から平然と受け止める。

「いつまでも待つさ。機が熟すまでな」

「……なあイリウス、これ以上は悪戯に時間を引き延ばすだけだ。ならば今がそのときではないのか？」

イリウスはやりわりと首を振った。

「今動けば、父上の二の舞になる。そして我々が失敗すれば、わずかにあつた光も消える」

「そんなもの、やってみなければわからん」

「ライン、我々に失敗は許されないのだ。たとえ十年待つことになるつと、成功すればそれでいい」

ラインは探るような目つきになった。

「……お前は一体、何を待っているんだ？ お前の言う『機』とは、一体何だ？」

「……」

答えようとしないイリウスに、ラインはやや苛立ちを見せた。

「おい、イリウス」

「……レイザードは今、二つの大きな傷を負っている」

「……二つの傷？」

「そうだ。一つは、カルファラの支配下にあるという傷。そしてもう一つは、セルベスが王位に就いているという傷だ。残念ながらこの二つの傷は、同時に治療することはできない。ならば、どちらを優先して治さねばならないか。答えは簡単だ」

イリウスはさらに続ける。

「カルファラの支配下にあるという傷はな、セルベスが王位にあつたからこそ負った傷だ。つまりセルベスこそ、レイザードを蝕む元凶なのだ。——仮に、レイザードを解放できたでしょう。だが、セルベスが王位にある限り、この国に未来はない」

いつも穏やかなイリウスからは想像もできないほどの、底冷えのする声だった。

「……………」

ラインは、じっと黙ってイリウスの話を聞いていた。

イリウスの言うことは、わからないわけではなかった。むしろその通りだと言えるだろう。

しかしだ。

「俺は戦場で戦う人間だ。頭を使うことはどうも苦手だ。だが、お前の言っていることが間違っていないということぐらいはわかる。しかしな、なら一体、誰を王位に就けるといふんだ？」

現在、第一位の継承権を持っているのはファルナス王子。続いて、第二位の継承権はジラード王子が持っている。

継承権を持つている者は他にも沢山いるが、よほどの出来事でも起きない限り、セルベスの後はファルナスが継ぐことになる。そしてその次がジラードである。

「ファルナスとジラードは駄目だ。話にならん」

即、切り捨てたイリウスである。

「ああ。あの二人を王位に就けたところで、何の解決にもならん。ならば後は側室ということになるが、直系を差し置いて側室の生まれの者を王位に就けることなどできんぞ」

「直系ならもう一人いるだろう」

イリウスはやんわりと言った。

彼の言わんとすることが瞬時にわかったラインは、明らかに顔色を変えた。

「お、おい……待てイリウス、それは」

「あの方しかない。レイザードを救える人間は」

「確かに、確かにそうかもしれん。あの方は強く、それでいて聡明な方だ。しかし、しかしだ、それがどういうことかわかって言っているのか？」

「……ああ」

イリウスの静かな肯定。

ラインは苦渋の表情を浮かべ、俯いた。

「……あの方は、女性だ」

「……わかている。だが、王族とはそういうものだ」

「……俺はあの方を小さい頃からよく知っている。お前もそうだろう？」

「……私とて、他に手があればそれを選んでいる。だがどれだけ考えても、あの方に王になってもらう以外、この国を救う方法はない」

「……俺は言えん、言えるわけがない」

「……私が、折を見て話そう。その結果、あの方にどのように思われようと、私はそれを甘んじて受けとめる」

相変わらず静かな口調だが、覚悟の重みがあった。

八章 シャトリナ

シャトリナは交易によって発展した商業都市である。

旧レイザードの時代では、諸外国から多くの商人が訪れていたものだ。

カルファラの占領下となってから、一時その数は激減したものの、情勢が落ち着いてからは再び多くの商人が訪れるようになっていく。執政官一つで、町はルナンのようになったり、このシャトリナのようになったりもする。そういった点で見れば、シャトリナは幸運であると言えるだろう。

「ほらよ」

男は訝しんだ表情で剣を受け取り、刃をよく観察した。

刃毀れが直ったわけではない。よく使い込んでいた剣だったため傷も沢山ついていたが、それらがなくなっただけでもない。

男は疑わしそうな目つきで青年を見やった。

「見たところ、変化はないようだが？」

「試し斬りしてみな」

青年は男に木片を手渡した。かなり太めの木片である。これを斬るとなると、相当の腕力と技術が必要となる。刃毀れのしているこの剣で斬れるとは到底思えない。

男は躊躇った。

周囲の目もある。もし斬れなかった場合、自分の腕が未熟だなどと思われたらたまったものではない。

「心配すんな。もし斬れなかったら、そのときは俺の責任だ。もちろん金もいらん」

「いいだろう」

そこまで言われたらやらないわけにはいかない。男は木片を軽く上に投げると、剣を振り下ろした。剣はまるで豆腐を斬ったかのように、何の抵抗もなく木片を鮮やかに寸断した。

周囲で見ていた野次馬たちから、「おお」と感嘆の声が上がった。が、一番驚いていたのは斬った本人である。

斬れ味が明らかに新品の剣を上回っている。名剣の領域に達しているだろう。

「まさか……こんなことが。お主、一体何をしたのだ？」

「企業秘密だ。それよりおっさん、いい腕してるじゃねえか」

「む？ まあ、な」

自分より明らかに年下の若造だが、褒められて妙に嬉しかった。

「では代金の10シルトだ。しかし、本当にこの値段でよいのか？ 以前鍛冶屋に研ぎに出したときの三分の一もないが」

青年は差し出された銅貨を革袋に放り込むと、男に言った。

貨幣は国によって異なるが、金貨、銀貨、銅貨の三種類によって成り立っていることは、ほとんどの国で共通である。

ちなみにここレイザーでは、現在はカルファラの貨幣が使用されている。

カルファラの通貨単位は『シルト』。

1シルトは銅貨一枚。100シルトで銀貨一枚。そして10000シルトで金貨一枚である。

普段、庶民が日常的な買い物で使用するのは主に銅貨と銀貨。金貨は見かけること自体稀な貨幣である。

「さっきも言ったが、実際に研いでるわけじゃないし、効果も七日ぐらいしか続かねえ。ただし七日以内なら、剣が折れない限り何度戦っても効果は持続する」

「持続期間を延ばしたりはできないのか？」

「できないわけじゃないが、商売にならねえだろ」

「ふ、ふふははは。確かにな」

あまりに正直かつストレートに言う青年が可笑しくて、男は声に出して笑った。

「七日後、まだこの町にいるのか？」

「さあな。もしいたら、また付与してやるよ」

「ああ、頼む」

男は去って行った。あの様子ではまた七日後にくるだろう。こんな感じで青年は、着々と金を稼いでいったのであった。

夕暮れになる頃には、革袋は銅貨と銀貨で一杯になっていた。三日前からの売上と合わせればかなりの額になる。しばらくは金に困ることはないだろう。

客足が一時途絶えたときを見計らって、青年はどつしりと重くなつた革袋を片手に引つ提げ、露店が並ぶ大通りを後にした。

《んー……？》

それは宿屋に帰る途中のことだった。町の中央広場を歩いていたときのこと。奇妙な感覚が青年を襲った。それは昨日も感じた感覚

だった。

上手く説明はできない。しいて言うなら、違和感のようなものだ。昨日は捨て置いた。自分のいた世界との違いからくるものだと思うたからだ。

だがその感覚は、昨日よりもはっきりとしてあった。

《何だ……？》

以前にルナンを見ていたから余計にそう感じるのだろうが、シャトリナは確かに活気がある。

人々も庄政で苦しんでいるようには見えないし、一見平和そのものである。

しかし、何かがおかしい。青年にもはっきりとはわからないが、どこか違和感があるのだ。

《違和感……？ いや違うな……逆だ》

違和感はあるって当然なのだ。

自分はもとも違う世界からきたのだから、何もかもに違和感があつて当たり前のはず。

しかし、だ。

《シャトリナ（ここ）には違和感がねえ……》

あの、腐敗した闇の世界と違和感がないということが、妙な話なのだ。

《何かあるな……》

青年は直感的に感じた。

活気に満ちた平和な町。その陰に、薄汚い邪悪な闇が隠れている。恐らく、ろくなものではあるまい。

表に見えないもの、つまり意図的に見えなくされているものは、大概はそういうものである。

そして表が明るいほど、裏の闇は深い。

光が強いほど、影が濃くなるように。

露店が並ぶ通りから路地に入ると、一転して静かな空間が現れる。網の目のように張り巡らされた高い塀は、まるで侵入者を拒むかのようにそびえている。

そんな、迷路のように入り組んだ裏通りを進んでいくこと約半日。廃屋と廃屋に挟まれるようにして建つ、一軒の小さな酒場。

「ここに……」

セリアはフードを深くかぶった状態でそこにいた。

ここを探し当てるのに三日かかった。青年と合流するまでまだ二日あるが、決して余裕があるわけではない。

シャトリナに到着して、宿屋で一休みした後、セリアは青年に別行動を提案したのだった。

何か確信めいた深い理由があつたわけではない。ただ何となく、ここから先は青年の手を借りてはならないと思ったからだ。我々が

ら勝手な考えだと自覚していたが、青年は何も聞かず、ただ「おう」と言っただけであった。

「……よし」

セリアは意を決し、扉に手をかけた。

ゆっくりと控えめに扉を開けると、内側につけてあった鐘が、カランと鳴った。

中には、カウンターの奥にいる酒場のマスターを含めて男が四人、マスター以外は見たところ三十台前後である。

彼らはそれまで親しげに会話していたが、来店してきたセリアの姿を見ると会話をやめ、眉をひそめた。

当然の反応である。

身形こそ旅人だが、人目を引くには十分すぎる美貌のセリアである。男たちにしてみれば、そんな若い娘が一人で酒場に入ってくることに自体妙であろう。

セリアは改めて店の中を見渡した。目的の人物の姿はない。

「誰かお探しかな？」

声をかけてきたのは、カウンターの奥にいるマスターであった。

年齢は五十台前後といったところ。精悍な顔立ちをしている。

セリアはカウンターの前まで移動し、フードを脱いだ。流れるような金髪がさらりと零れた。

皆、目を丸くする中、セリアはマスターに尋ねた。

「マリベル・シュナイザーという人物をご存じですか？」

マスターはそれほどでもなかったが、残る三人の雰囲気明らかに

に変わった。そのうちの一人が静かに立ち上がり、そつと扉の前に移動した。事実上セリアの背後をとる形である。

《……………》

セリアは警戒半分、呆れ半分であつた。

男たちの行動は悪気があつてのものではないだろうが、彼らのその態度がすでに、マリベルを知っていると語っているようなものだ。

「どちらにおられますか？」

「……………」

マスターもまた、この少女がそれを悟つたことを見抜き、男たちの行動に内心舌打ちしていた。これで惚^{とぼ}けて済ませることができなくなった。

「お嬢さん、名前は？」

「セリア。……………いえ、セリアシュリンと申します」

マスターは眉をひそめた。

レイザードの民ならば、その名を知らない者はいない。

レイザード王国第一王女セリアシュリン。二人の愚兄がいるがゆえに、民衆の、彼女に対する人気は圧倒的に高かつたのである。

しかし普通に考えたなら、目の前のこの少女が本物であるはずがない。

顔立ちは確かに美しい。所作の一つ一つにも気品がある。しかし、一国の王女がこんな寂れた酒場に一人で足を運ぶだろうか。しかも旅の剣士の身形で。

本物ではない。本物であるはずがない。——しかし。

マスターは過去に一度だけ、セリアシュリン王女を目にしたことがあった。無論そのときは、王女は立派な身形だったが。

マスターは記憶の中の王女と、眼前の少女を照らし合わせた。

——似ている。が、それだけで本人と断定するわけにはいかない。

「証拠を、見せていただきたい。あなたが王女であるという証を」

「……………残念ながら証拠はありません。ですがご主人、マリベルならわかるでしょう。彼女に会わせてください。お願いします」

セリアは頭を下げた。その瞬間、マスターははっとした。

マスターの脳裏に浮かぶ幼き頃の王女の姿と、眼前の少女の姿が、寸分の狂いもなく重なった。

「……………王女様」

マスターは感極まった面持ちでカウンターの奥から出てくると、その場に両膝をついた。他の男たちはマスターの態度に困惑し、顔を見合わせている。

「お立ちください。今の私に頭を下げられる資格などありません。二年もの間、職務を怠慢していた愚か者です」

冷やかな口調で己を嘲るセリア。そんなセリアに、マスターが反論しようとしたそのときだった。

「やっときたの？ 遅かったね」

ボーイソプラノの声がした。聞き覚えのある声に、セリアは声の

した方を向いた。

「あ」

そこには、栗色の髪の少年がいた。年齢はまだ十台の前半だろう。その華奢な体格の割りにやや大きな服を着ており、見た目にもかなりぶかぶかである。

「アテル、お久しぶりですね」

「そんなことはどうでもいいからさ、母上が呼んでる」
「マリベルもいるのですか？」

そんなことを尋ねている内に、酒場の奥から一人の女が姿を現した。

妖艶な香り漂うその美女は、燃えるような赤い髪をしており、唇に微笑をたたえていた。

「マリベル……」

「はい、セリアシュリン様」

再会に多くの言葉はいらなかった。
それで十分だった。

「さて早速ですが、シナリオ創作のお手伝いを願えますか？」
「シナリオ？ 一体何のです？」

不思議そうに言うセリアに、アテルが答えた。

「レイザード解放のだよ。そのためにきたんでしょ？」

セリアは意表をつかれたように立ち尽くしていたが、それも一瞬だった。すぐさま凜とした表情でマリベル、アテルに続き、酒場の奥へと入っていった。

八章 シャトリナ（後書き）

もずは深刻なエラーから回復しました。

投稿を間違えて八章だけ別に投稿してしまった……。

九章 闇のにおい

真夜中。

昼間とは打って変わった、静寂に満ちたシャトリナがあった。

人の往来はまったくない。

そんなシャトリナの通りを、闇に溶け込むようにして動く一つの影があった。

——青年である。

宿に帰って一眠りした後、先ほど感じた違和感がやはり気になって、夜のシャトリナに繰り出してきたのである。

「それにしても、誰もいねえな」

露店はもちろんのこと、人っ子一人見当たらない。
昼間の賑わいからすれば、酔っ払いの一人や二人、ふらふらと歩いていてもおかしくはないのだが……。

涼しげな夜風が吹き抜けていった。

「……」

それは、ほんの微々たるものだった。
注意していなければ、まず気づかなかっただろう。

その……闇のにおいに。

ただの死臭や腐敗臭などではない。そんな生易しいおいではない。

もっと禍々しく、邪悪なおい。

この命溢れる世界で、そのにおいは酷く臭う。

青年が元いた世界では馴染み深いにおい。それをこの世界で感じ取ったため、違和感となって表れたのだ。

「気にいらねえな」

青年は言った。

先ほどから後ろをつけてきている連中に聞こえるように。

「——なあ、おい」

青年はゆっくりと、静かに振り返った。

マリベルとアテルに先導され、酒場の奥から螺旋状の階段を下りて行くと、薄暗い部屋に出た。

木製のタルが沢山並んでいる。恐らく中身は酒だろう。

そこを通り過ぎると小さなテーブルがあつて、背もたれのない椅子がいくつか置かれていた。

「小汚い場所で申し訳ありませんが、おかけください」

マリベルに促され、セリアは椅子に腰かけた。
それを確認してから向かい側にマリベルが座り、その隣にアテル
がちよこんと座った。

しばらく、沈黙が流れた。

セリアとマリベルは互いを見据え、そんな二人をアテルが交互に
見やっている。

「よくぞ」

先に口を開いたのはマリベルだった。

「よくぞ、お戻りくださいました」

セリアは静かに頭を振った。

「二年も無駄に過ごしました」

「我々がそれを望んだのです。二年前姫様は、イリウス様の計らい
で国外へ逃れられました。当時は何分、事は急を要していましたの
で、詳しくご説明することができなかったのです。国外へ逃げてい
ただいた理由はただ一つ、姫様の身に危険が迫っていると判断した
からです」

「なぜ……私だけが逃げなくてはならなかったのです？」

「それはイリウス様からお聞きになられた方がいいでしょう。私が
言えることは、二年前の動乱はいまだ深い闇を抱えているというこ
とです。安易に触れては取り返しのつかないことになりかねません」

二年前の動乱。

つまりセルベス王に対する反乱とカルファラの侵攻。

マリベルの言う通り、セリア自身、あの動乱には何か裏があると感じていた。

何しろよくわからないことが多い。

最も不可解なことを一つ挙げるとすれば、セルベスが現在も王位に就いている点である。

あの反乱は、セルベス政権に対するクーデターであつた。

そしてそれは、成功したのだ。

カルファラが侵攻してきたことでうやむやになってしまっているが、本来ならセルベスは討ち取られていて不思議はないのである。

カルファラとの間に何らかの密約が交わされたのかもしれないが、どうもよくわからない。

「ところで姫様、一つお聞きしたいことがあるのですが」

マリベルが切り出した。

「何です？」

「実は幾日前に、王都で姫様を見かけたという情報があつたのですが、もしや王都に行かれましたか？」

セリアは一瞬、事実を言うべきか迷つた。

二年間留守にしていたとはいえ、王族である自分が王都へ行き父親に会うこと自体は、何ら不思議なことではない。

しかし、それが原因で二度も命を狙われたことは確かなのだ。

青年と巡り会わなければ間違いなく死んでいただろう。

ありのままを話して無理に心配をかけることもないのではないかが。

《……正直に話した方がいい、か》

「父に会っていました」

「……やはり、そうでしたか」

マリベルの表情がやや険しくなった。

「何か問題でも？」

「……敵にあなたという存在が知られてしまいました。もちろん、いずれは知られることです。ですが、そのときはなるべく遅い方がよかったです」

と、マリベルはすつと椅子から立ち上がった。

「姫様、もはや時間に猶予はありません。今すぐイリウス様のもとへ急ぎましょう。敵に姫様の存在が知られている以上、ここも安全とは言えません」

以前、自分を狙いにきた連中がまたくるというのか。

確かにすでに二度襲われている。三度目がないなどという保証はどこにもない。

ということは……。

《ここに留まると迷惑がかかる、か》

「わかりました。すぐにでも——」

そのときだった。

微かだがセリアの耳に、ガラスが割れるような音が聞こえてきたのだ。

マリベルとアテルにも聞こえたらしく、三人は揃って上を見上げた。

「……」

上は酒場だ。コップの一つや二つ、割れることもある。

しかし。

しかしだ……。

セリアはゆっくりと、静かに椅子から立ち上がった。アテルもそれに倣う。

どうも嫌な予感がする。

得体の知れない不安が、ぞわりと背筋を這い上がってくる。

——何かが起こっている。

殺気や敵の気配を感じたわけではない。

言うなればただの勘。

だが、されど勘。

勘は単なる当てずっぽうではない。

勘とは即ち第六感的な感覚。

目、耳、鼻、舌、肌。

これらで感じることはできないが、何となくわかるといった感覚。

曖昧ではあるが、戦士ならば心得ている。

事戦闘において、その勘がどれほど重要になるのかを。

「見てまいります」

マリベルが言った。

「待つてください。私も行きます」

「いいえ、姫様はここでお待ちください。ただ、私が二分経つても戻らない場合、その扉から外へ。しばらく歩けば、地上へ出られます」

マリベルは、奥にある扉に目配せした。

「マリベル。また私に、逃げろと言うのですか」

「姫様、あなたはレイザードの最後の希望なのです。だからあなたを死なせるわけにはいきません。あなたを守るためなら、私やアテルは喜んでこの身を捧げます」

「私は……そんなことをしてほしくはありません」

「姫様の意思に関係なく、王族は守られるべき存在なのです。——でも私やアテルは、姫様だから守るんですよ？」

マリベルは満足げに微笑み、静かに歩き出した。

まるで、未練なく死地に赴く戦士のような、そんな様。

「マリベル！」

セリアは堪らず後を追おうとした。

二度と会えなくなるような気がしてならなかったのだ。

が。

「だめっ！」

その小さな身体で、両手を一杯に伸ばして、アテルが立ちほだか
った。

「アテル……」

セリアは驚いていた。同時に、気圧されてもいた。
穢れなき澄んだ瞳に宿るは、確固たる決意の光。
揺るぎない強き意思。

「……………わかりました、従いましょう。アテル、道案内を頼めま
すか？」

「うん、ついてきて」

アテルを先頭に、二人は部屋を後にした。

十章 おいを辿って

一体どれくらい歩いただろう。その洞窟のような地下道を。いや、本当はそんなに歩いていないのかもしれない。

しかしセリアには、すでに一時間近くも歩いているように感じられた。

引き返したい衝動に駆られたのも、一度や二度ではない。

先頭を歩くアテルは、右手を掲げるようにして足早に歩いている。その掌に踊る炎がなければ、辺りはたちまち漆黒の闇と化すだろう。

アテルは幼少の頃から、魔術に関して非凡な才能を有していた。あのマリベルの息子なのだ。当然と言えば当然のこと。

セリアは頻繁に背後を気にしながら歩いていく。しかし幸か不幸か、誰かが追いかけてくる気配はない。

《マリベル……》

その事実がすでに、事態の深刻さを告げていた。

マリベルは一流の魔術師である。その腕前は、レイザードでも五指に入るほどだ。事戦闘に関して、マリベルが引けを取るとは思えない。例え相手が手練の殺し屋であっても。

しかし、それならもう追ってきてもいいのではないか。

仮に何者かの襲撃があったとしても、マリベルの実力なら容易に対処できるはず。

それなのになぜ……なぜ追ってこない。

「大丈夫だよ」

セリアの動揺を気配で感じ取ったのだろう、アテルがそう言った。

「母上は負けない。母上の強さは僕がよく知ってる。絶対に負けない」

「……」

まるで自分に言い聞かすような口調。

そう、誰よりも引き返したいのはアテル自身なのだ。

まだ十五にも満たない子供が、自分を押し殺して忠義のために動いている。

《……私は、どれほど未熟なのだ……》

情けなさとし訳なさで涙が出そうだった。

セリアはアテルのその小さな背中に、ただ無言で頭を下げた。

地面に力なく転がっているその者たちは皆、漆黒のマントを身にまとい、奇怪な仮面をつけていた。

どう見ても物盗りのようには見えない。

かと言って、ただの武装集団のようにも見えない。

あえて言うならば狂信者の集団。その類型。

——そして。

「……馬鹿、な……」

最後の男は、そう小さく言い漏らすと、糸が切れたように崩れ落ちた。

戦闘は終結を告げた。

——いや。

果たしてあれが戦闘と呼べるものだったのかについては、議論の余地が多分にある。

たたかいの『た』の字を言う前に、勝敗は決していたが、しかし。

青年の眼差しはむしろ鋭さを増し、遠くを、闇の向こうを静かに見据えている。

「まさかと思うが、隠れてるつもりか？」

闇の向こうに気配が生じた。

《……何だ？》

音もなく近づいてくる。

姿を現したのは二十歳前後の男。

整った顔立ちに薄い笑みを浮かべている。

年齢や背丈、体躯に関しては青年とあまり変わらない。

決定的に違うのは双眸。

それはあえて形容するなら、血に飢えた魔物のような、狂気に満ちた目。

——しかし。

《何だ？ こいつは……》

青年が訝しんだのはそんな箇所ではない。

外見というよりはむしろ内面。

その男が持つ、人によってそれぞれ異なる気配。

その気配が、妙なのだ。

《気味の悪い野郎だ……》

目に映る対象はあくまで一人。が、その者が持つ気配は二つあった。

気になるのは二つ目の気配。

無論、微かではある。微かではあるがまず間違いない。

男の中にもう一つ、別の気配が存在している。

「……お前、腹の中に別の生き物でも飼ってるのか？」

とりあえず聞いておく。死んでからでは答えは返ってこない。

男は青年の問いに、やや驚いたような表情をしてみせた後、酷薄に笑った。只人なら震え上がるような、凄味のある笑み。

「貴様、わかるのか。なら、手加減する必要はないな。——『メイフィル』、ご指名だ」

「メイフィル？」

すると男の上半身は、力が抜けたようにだらりと垂れ下がった。

「何やってやが……ん？」

——ドクン……。

男の体内で何かが胎動している。

攻撃をするなら今が最大のチャンスではあるが、青年としては、男が何をしようとしているのか知りたいという欲求の方が強かった。

《気配が変わりやがった……》

まるで氷のように冷たく、そして鋭い気配へと。

先ほど感じた二つ目の気配が、恐らくこれだろう。人間らしい温もりなど微塵もない。

男はゆっくりと身体を起こした。

その顔には一切の表情がなく、どこまでも冷たさに満ちていた。目に宿っていた狂気も消え、あるのは波一つ立っていない静寂。

「メイフィル、参る」

先手は男——否、メイフィル。

自然体のまま、一瞬で青年の背後へ移動したメイフィルは、いつの間にか手に握っていた短刀で青年の首を狙った。

首筋を切るのではなく、首そのものを飛ばすほどの攻撃。

しかし青年は動かない。

視線を巡らすことすらしない。

あくまで余裕の青年。

鋭い刃が青年の首に当たる。

しかし刃は青年の首の皮一枚切ることなく、根元からパキンと折

れた。

使い物にならなくなった短刀を手放したとき、すでに青年はメイフィルと正対していた。

メイフィルの時間感覚の中では、青年だけが動いていた。

そう、それは言うなれば刹那を超えた神速。メイフィルは、繰り出された掌打が自分の腹部をとらえるのを、ただ見ていることしかできなかった。

避けたり防いだりするなど論外。身構えることすらできない。そんな刹那の瞬間に、自分は動くことはできない。

掌打は破壊力をもなったものではなかった。
単に押し当てられただけに見えた。

しかし身体はくの字に折れ曲がり、足がわずかに地面から離れる。途端、凄まじい衝撃が内腑を貫通し、背中から突き抜けていった。

「がはっ」

肺の中の空気を全て吐き出し、メイフィルはその場に片膝をついた。

——勝てない。

刹那の攻防で理解した。

強さの次元が違う。

あえて例えるなら獅子と鼠。いかに強い鼠であろうと獅子には勝てない。

しかしメイフィルはある感情。長らく忘れていた高揚感を感じていた。

「——面白い」

「そいつあよかったな。だが終わりだ」

とどめの一撃を見舞うべく、青年は拳を構える。

するとメイフィルは青年を見上げ、薄らと笑みを浮かべた。

「また会おう」

「何？」

そう言い残すと、メイフィルはどさつと倒れこんだ。

同時に、メイフィルの気配が消失する。

青年は構えていた拳を戻し、倒れ伏している男の首筋に手を当てた。

「……」

男は絶命していた。

いや、今となつてはその亡骸が男なのかメイフィルなのかすらわからない。

その肉体は果たしてどちらのものだったのか……。
気になるのはメイフィルが言い残した最後の台詞。

——また会おう。

《どうも、面倒な奴に惚れられた気がするな……》

「しかも男じゃねえか」

はあつと溜め息をつき、青年はその場を後にした。

どっぴりと闇に沈んだ街は一見、何の異常もないように見える。

少なくとも目に映る街並みは平穩そのものだ。

ここからやや離れた場所に妙な気配がちらほらと蠢うごめいているが、
気になるほどではない。

今気がかりなのは闇のにおい。

そしてそれは、少しずつ濃くなっている。明らかにどこから漏
れ出している。

「……………」

しばらく行くと、一軒の民家が青年の目にとまった。

明かりが漏れていないことからして、住人はすでに寝ているのだ
ろう。

別に不思議ではない。

貴族ならともかく、一般の民衆にとって蠟燭ろうそくは貴重品である。必
要なとき以外に使用することはほとんどない。日が沈んで辺りが暗
くなったら、明日に備えてさっさと寝るのが普通である。

「無人、か」

家の中に人気はない。

単に留守なのかそれとも空家なのかはわからないが、これも別に
不思議ではない。仮に空家だったとしても、そんな家はいくらでも
存在する。

が、におう。

この清浄な大気の中で、そのにおいは酷く目立つ。

青年は静かに、その民家の扉を押した。

ギィと音がして、扉がゆっくりと開いた。

中には木のテーブルが一つあるだけで、その他生活に必要な家具
類は何一つなく、しかも埃にまみれていた。

長年誰も住んでいないのだろう。色々なところがかなり傷んでいる。

青年は扉を閉めると、慎重に床を見渡していった。

青年には確信に近い予感があつた。

闇のにおいの発生源はここではない。しかし、ここから漏れ出していることは間違いない。ならばこの家のどこかにあるはず。においの発生源へと繋がっている、隠し通路のようなものが。

青年の視線が、テーブルの下でとまった。

テーブルを動かし、その床をコンコンと軽く叩く青年。幾度かそれを繰り返した後、床に敷かれていた板を取り外した。

そこにあつたのは、一人通れるほどの小さな穴。

そして青年の行動は早かつた。

一切の躊躇いなくその穴へ飛び込んだのだ。青年の目には全てがよく見えているのだろうが、普通の人間にとつてはまさに暗黒の穴である。よほど肝っ玉の据わつた者でもそんな芸当はできまい。

青年は漆黒の闇の中を落ちていく。

穴には梯子がついていたが、青年はそんなものは使わず、ただ重力に任せて落下していく。

十五メートル、いや二十メートルほど落ちただろうか、穴はやや開けた通路のようなところへ繋がっていた。

青年は音もなく着地する。

驚いたことに、意外としつかりとした地下通路だった。ところどころ松明の火がぱちぱちと燃え、辺りを薄暗く照らしている。青年が落ちてきたのは、換気用の穴といったところだろう。

「おうおう、懐かしいにおいがしてやがる」

不敵な笑みを浮かべつつ、青年は歩き出した。

周囲に人気はない。あつたとしても問題はないが、なければならない方がいい。

右へ左へ、通路はまるで迷路のように入り組んでいた。
一本道なので迷うことはないが、その分距離は長く感じる。

《それにしても、何ともくだらねえにおいだな》

青年の表情から笑みが消えていた。

と言うのも、青年はこのにおいがあまり好きではなかった。

知り合いの中にはこういったたにおいを好む者もいたが、青年自身はあまり良く思っていないかった。

血の臭いや腐った死体の臭いは、別に何とも思わない。

そんなものに揺れ動く感情はすでに失ってしまったし、またその程度のものに一々反応しては、あの世界では生きていけない。

が、闇のにおいだけは好きにはなれない。

だから青年は、そんなにおいが充満していたあの世界が嫌いだった。

しかし今は、そんなにおいがこの世界にも存在していたという事実、だんだんと腹が立ち始めていた。

「ん？」

通路の先に、大きな扉があった。

見るからに重そうな、鉄製の扉である。

開けるのに大の大人が三人は必要だろう。

扉の前には見張りらしき輩が二人。

その出で立ちは、先ほど街中で一戦交えた者たちと同じ。

漆黒のマントをまとい、奇妙な仮面を身につけている。

青年がさらに堂々と近づいていくと、さすがにその二人は気づいたらしく、

「とまれ」

その声は、背筋がぞつとするほど不気味な響きを孕んでいた。
青年は静かに足をとめた。

「ここより先は聖域。我らが神の導きなき者通ること叶わず」

「ほう、聖域の割には随分と臭うな。さっきから血の臭いと腐臭しかしていない。お前らの神つてのは、随分と血生臭いんだな」

「我らが神を愚弄した罪、万死に値する」

そう言うなり、二人の見張りは剣を抜き放って飛びかかってきたが、その動きは先ほど戦ったメイフィルに遠く及ばない。
たちまち青年に倒され、地に倒れ伏す。

「……我らが神よ……この身をお捧げいたします……」

見張り二人は動かぬ軀となった。

「……………阿呆が」

青年は歩き出した。

鉄製の扉の前までくると、左手に力を込めて無造作に押した。

ミシッ

そんな音がしたのも最初だけであった。

己の身長よりも高い、しかも分厚い鉄製の扉が軽々と開かれていく。

すぐに扉は開ききり、青年の視界に内部の光景が飛び込んできた。
その光景には、青年でさえ一瞬立ち尽くしてしまった。

「……………お前ら、何やってんだ？」

その青年の声は、青年自身でさえ、ここ最近聞いたことがないほどに冥く沈んでいた。

十一章 目指すは侯爵の屋敷

気配が二つ、闇に紛れながら移動していた。

その足取りは小走りだが慎重。単に夜道を警戒しているにしては、やや過剰すぎるほどだ。

そしてその周囲への気の配り方。まるで何者かの襲撃に備えているかのような印象さえ受ける。

この二人、セリアとアテルである。

二人はどつぷりと日が暮れたシャトリナの街を、北へ移動している最中であつた。

目指すはシャトリナの最北にあるセルディオス侯爵の屋敷。

地下の洞窟内では、ついにマリベルと合流することはなかった。

現状においてもはやこの事実が、何か予定外のことが起こつたと見えていい。いや、そう見なければならぬ。

シャトリナへの道中襲つてきた連中か、あるいは別の敵か。

敵を絞る必要はない。襲ってくる者全てが敵。

そしてその敵が何かしらの行動をとるのなら、屋敷までのこの道中しかない。

急がなければならない。

敵は、もうすぐそこまできているかもしれないのだ。

「もう少し。この通りを抜けたら着くから」

隣を走るアテルが言った。

セリアは首肯する。

「ええ、昔きたことがありますから覚えています」

夜なので決して視界が利くというわけではないが、それでも脳裏

に浮かぶ朧げな風景と一致するところがある。

屋敷まではもう幾ばくもない。あの地下通路のおかげで、かなり距離を稼ぐことができた。

《このまま、何もなければいいが……》

今のところ、何者かが追ってきているような気配はない。

それにこの広い道なら、仮に襲撃を受けたところで応戦しやすい。無論、ないに越したことはないが。

しかし万が一のとき、交わしきれないほどの敵が現れたなら、そのときは――

「生きることだけ、考えててね？」

セリアははつとした。いつの間にかアテルがこちらを見ていた。セリアは内心の動揺を隠しつつ、

「わかっています」

「……ならいいんだ」

アテルは視線を前に戻す。

《それが、子供の言う台詞か……？》

腹が立ってしかたがなかった。

自分の不甲斐なさに。そして、そんなことを子供に言わせる、この現実。

「――っ」

セリアは唇を噛みしめた。

苦々しい表情を浮かべるセリアをちらっと一瞥したアテルは、何も言わずに再び前を見据えた。

すでにだいぶ走り続けている。

セリアはそれほどでもなかったが、アテルはやや乱れた呼気を繰り返して、苦しそうである。

通りの突き当たりを右に曲がる。もう屋敷は目と鼻の先だ。

と、そこに。

「お待ちしていました」

鎧に身を包んだ騎士が十人ばかり、片膝をつき、頭を垂れていた。先頭にいる隊長格の男が顔を上げ、

「イリウス様のご命令により、お迎えにあがりました。セリアシュリン様」

「味方？」

アテルが息を整えながら問うた。

男は静かに首肯する。

「では参りましょうか。イリウス様がお待ちです」

騎士たちはさっと立ち上がり、左右に退いて道を開ける。が、セリアは動かない。じっと男を見据えている。そしてしばしの沈黙の後、

「名を。名と階級を述べなさい」

静かに言った。

「これは……失礼しました」

男は深々と頭を下げた。

「小隊長のキースと申します」

「どちらの所属ですか？」

「恐れながら、セリアシュリン様は長らくこの国を離れておいでございました。その間に、新たに編成された部隊が多々ございます。故に、私の所属を申し上げたところで、わかりにはなりますまい」

「……そうですね」

「わかりただけて幸いです。では、参りましょう」

「わかりました。アテル、行きましょう」

「——うん」

セリアとアテルの周りを騎士たちが囲むようにして、一行は歩き出した。

侯爵の屋敷はもう見えている。後数百メートルも歩けば、荘厳な造りの門が迎えるだろう。

一行の歩調は速くはない。ゆっくりで、かつ一定の速度を守っている。

それはまるで、何かのタイミングを見計らっているかのようだ。

《そんなことをせずとも、こちらはいつでも構わないというのに》

セリアは勿論のこと、アテルもとっくに気づいている。

この者たちの言動が不自然だということに。

まず第一に、この者たちはイリウスの命令で迎えにきたと言った。この台詞ですでに、セリアはこの者たちが味方ではないということを確認した。

第二に、この足取りである。先ほどマリベルが言ったように、今は一刻を争う状況なのだ。にもかかわらずこのゆったりとしたペース。時間を稼ぎ、尚且つ襲撃のタイミングを計っているのが手に取るようにわかる。

そして何より、この者たちとの出くわし方、そして場所。待ち伏せしていましたと公言しているようなものではないか。

気になるのはこの者たちの詳細である。

殺し屋ではない。

恐らくレイザードの人間だろう。

とすると、セルベス政権側に属する何者かの配下か。

と、そんなことを思考していると、前を歩く騎士たちの足取りさうらにがゆるやかになり始めた。

セリアらの足も自然とそれに倣う。

それから十歩も行かぬうちに、一行は立ち止った。

《いよいよか。とはいえ、大分屋敷には近づけた》

セリアは剣の柄に手をかけた。

「どうやら、お気づきになられたようですね」

前を歩いていたキースが振り返った。

「誰の命令ですか？」

「あなた様のよく知る方ですよ」

「セルベス王ですか」

キースはにやつと笑った。

「当たらずも遠からず、といったところです。しかしまあ、無様なものですな。まるで敗戦の将のようだ。二年前のあのときも逃げて、そして今またここまで逃げてきている」

嫌みっいたらしく、皮肉たっぷりにキースは言う。挑発のつもりで言っただろうが、残念ながらセリアの心にさざ波一つ立たすことはなかった。

「あなたの言う通り、二年前から私は逃げ続けていました。ですが今は、もう逃げないためにここにいる。私が言う逃げないとは、何も戦場から逃げないことではありません。目の前の現実から目をそらさないということです」

「ふん、戦場を知らぬ小娘が、わかったような口を利かないでいただきたいものですな。——さて、お喋りはこのあたりにして、死んでいただきましょうか！」

キースは剣を抜き放った。それに伴い、他の騎士たちも次々に剣を抜く。

アテルはやや緊張した面持ちで臨戦態勢をとった。と、その唇がわずかに動き始める。何かを唱えているようだ。しかし、そこから漏れ出る言葉はすぐさま闇に溶け込み、騎士たちの耳には届かない。

「殺れっ！」

「させない！」

アテルが右手を大きく振るうとともに、紅き閃光が闇を引き裂いた。一瞬遅れて、セリアとアテルを守るようにして、地面から数本の火柱が天空へと駆け上る。周囲は一瞬にして昼間同然のように明るくなった。

「何っ！」

今まさに飛びかかろうとしていた騎士たちは、いきなり炎の魔術が展開したことに鼻を挫かれ、動きが大きく鈍った。それを見逃すセリアではない。抜き放ちざまそして返す刀。発生した風の刃がたちまち二人を斬り伏せる。

「なっ、何だその剣はっ！」

キースが吼えるのも無理はない。常人には斬撃が飛んでいるように見えるのである。そんな常識外れのことが可能な剣など……。

まさか……。

「魔剣かつ！？」

「命惜しくは退きなさい」

「ふざけるな！ 何をしている、かかれっ！」

しかし飛びかかってきた騎士は、アテルの放った火球に弾き飛ばされた。鎧の上から命中したとはいえ、昏倒するほどの衝撃は免れない。

「お、おのれええ！ 攻撃だ！ 一斉に攻撃しろ！」

もはや騎士の誇りや面子もあつたものではない。標的を仕留めさえすれば何とでも言い訳は立つ。今は任務遂行が最優先。

「くっ」

正面左右背後から敵が迫る。

たとえ猛者であつてもこうなると勝敗はわからなくなる。

一対一を十回繰り返し返すのと、一対十を一度に行うのではまったく話が違ふ。後者の場合、ただ強いだけでは生き残れない。圧倒的に強くなければならない。

「僕が道を開くから行つて」

アテルが言った。

——わかっている。自分がそういう立場にあるということとは。わかつてはいるのだ。だが、これだけは絶対に譲れない。

「できません」

詠唱に入っていたアテルは、それを中断し、驚いた顔でセリアを見やった。

「あなたが礎になる必要はありません」

セリアは剣を握る手に力を込めた。

今やアテルの放った火柱は消え、二人と敵との間に障害はない。

上段から斬り下ろそうとする者、下段から斬り上げようとする者、あるいは突き刺そうとする者。いかなる達人であっても、これらすべての斬撃を防ぎきることなどではしない。

二人の命運はここで潰れたかに見えた。

そのときだ。

凜とした声が走ったのは。

「猛る炎よ、我が意に沿って煉獄と成せ。——ファイアストーム焦熱烈波！」

放たれたのは紅の業火。その威力は苛烈にして甚大。まるで闇を吹き飛ばすかのような炎の衝撃波である。今まさにセリアとアテルに斬りかかろうとしていた数人の騎士たちは、為す術もなく炎に飲み込まれて絶命した。

「何だっ！」

今のは何だ。何が起きた。

キースを含め、生き残った四人の騎士たちは皆、二人への攻撃どころではない。状況の把握に右往左往している。

無理もない。レイザードは二年前の動乱を除けば、最後に戦争をしたのは今から二十年も昔なのだ。その戦争を知る者のほとんどがすでに退役している。

ここにいる騎士たちも、無論魔物の討伐をしたことぐらいはある。しかしそれは戦ではない。所詮狩である。狩で死ぬこともあるが、それは単なる不注意によるものが大半。

しかし戦場は違う。戦場では何が起こるか分からない。咄嗟の変化に対応、判断できるのは素質やセンスではない。経験である。

二年間、傭兵として生きてきたセリアの判断力には、キースなど

足元にも及ばない。

「はあっ！」

白刃が闇を切り裂く。

キースがはつとしたとき、セリアはすでに残り三人の騎士を倒し、尚且つ剣の切っ先をこちらに突きつけていた。

「ぐっ……。くう、おのれえ！」

「逃げるなら追いません」

「ば、馬鹿にしゃがつて！ 誰が、誰が貴様如きにつっ！！」

剣を振り上げ、キースは鬼の形相で向かってきた。

しかしそんなに頭に血が上った状態で、冷静に戦えるわけがない。

「死ねえええっ！」

その剣が振り下ろされる直前、セリアは驚異的な速さでキースの脇をすり抜けた。そして、ザザアと砂埃を立てて停止し、剣を鞘に収める。

「ぐふ……」

キースは、その唇から呻き声のような声を漏らすと、剣を振り上げた体勢のまま倒れ伏した。

「お見事です。姫様」

その声が聞きたかった。

「マリベル……」

「遅くなって申し訳ありません。——アテル、よく頑張りましたね」

マリベルは母親の顔になってアテルを見やった。

アテルは恥ずかしそうに目をそらし、

「全然平気」

「アテルには助けられました。彼がいなかったら、間違いなく死んでいました」

するとマリベルは打って変わって真剣な表情になった。

「姫様、実はどうやら、現状は思っていた以上に深刻です。恐らくですが、どうやら姫様はとんでもない連中に狙われています」

「とんでもない連中？」

「まずはイリウス様の屋敷へ。詳しい話はそこしましょう」

無論、セリアに異存はなかった。

マリベルを加え、三人となった一行は、イリウスの屋敷へと急いだ。

十二章 動乱の始まり

「あの小僧も、愚かなことをしたものだ……」
「まったくです」

暗闇の中、静かなやりとりがなされていた。

「こちらの動きが知られたかもしれません。——ご命令とあらばいつでも始末できますが？」
「そうしたいところではあるが、今は捨て置け。あ奴にはまだ動いてもらわねばならん」
「は」

男の声が二つ。

その口調とは対照的に、会話の内容は随分と物騒である。

「例の標的はどうだ」
「は……実はそのことについて、一つご相談があります」
「よもや実行不可能と言うのではあるまいな？」
「いえ、そうではありません。ですが、少々厄介な障りがあるようなのです」

「障り、か……」
「すでに三度、その障りに阻まれております」
「……詳しく話せ」
「それが……実はよくわからないのです」
「……わからぬ、だと？」

声に、ぞっとするものが混じった。

「申し訳ありません。ですがはつきりしている障りもございます」
「何者だ？」

「名はマリベル。レイザード王国の元宮廷魔術師です」

「マリベル……。シュナイザー伯爵家の者だな」

「はい」

「……なるほど、その者が標的を護衛しているのであれば、確かに障りとなるだろう。——だが、それは標的がシャトリナに入っただけのことであろう？」

「はい。実際のところ、マリベル・シュナイザーの方は大した障りではないのです。問題はもう一人の方。男ということがわかっていただけ、後は一切が不確かです」

「……」

しばらく沈黙が流れた。

敵の情報が掴めないことほど、気味の悪いことはない。

彼らはそのことをよく知っている。

標的を守っている謎の男。果たして何者なのか……。

「……力量は？」

「……計りかねます。早めに始末はしておいた方がいいでしょう。」

これは私の推測ですが、事の成り行き次第では、標的以上に厄介な存在に成り得るか？」

「何故だ？」

「一度目と二度目の襲撃ですが、死体を見たところ、妙なことがわかりました」

「ふむ」

「まず二度目の襲撃を行った者たちですが、全員魔術で殺されておりました。標的は魔術を使いません。したがって、標的を護衛している男が使ったと考えるのが自然でしょう。かなり力のある魔術師

と推測できます。――が」

「何だ？」

「一度目の襲撃における死体ですが、不明確な傷跡が刻まれた死体があるのです。魔術に長けている者に見せたところ、魔術に似てはいるが、魔術ではない、と」

「どういうことだ？」

「……わかりません。ただその者が言うには、根本的に力の質が違
う、と。どれだけ魔術を極めようと、こうはならないと申しており
ました。したがって結局のところ、その男に関してはよくわからな
いというのが現状です」

しばらくの間、沈黙が流れた。

「その障りを取り除かぬ限り、標的には近づけぬか……」

「恐らく」

「……わかった、その障りについては支部の方に話を通しておく。
早急に抹殺者^{サートラ}を要請しよう」

「それは心強いことです。障りはすぐにでも取り除かれることでは
よう」

それっきり、会話は途絶えた。

「このときを、どれほど待ち望んだことか……」

イリウスは常に柔和な微笑をたたえている。そのためイリウスをよく知る者でも、彼の表情を見ただけで本心を読み取ることは難しい。

実のところ、イリウスの性格は決して温厚ではない。むしろ感情の波は激しい方である。要するに、あまり顔に出ないのである。

が、このときばかりは違っていた。

紡がれる声は小さく震え、目尻には光るものがある。イリウスがここまで感情を表に出すのは滅多にない。そんなイリウスの様を見て、セリアもまた胸に熱いものが込み上げてきた。そして、ここに来たのは決して間違いではなかったと、確信を持つに至っていた。

「お久しぶりです、イリウス殿」

「よかった…… 本当によかった……」

固い握手を交わすその二人を微笑ましげに見ていたマリベルだったが、やがて表情を引き締めて言った。

「その続きは、レイザードを解放してからにしましょう」

今は長々と感動の再開が続いているわけにはいかないのだ。無論、イリウスとセリアに依存はなかった。

イリウスの屋敷は広い。侯爵なのだから当然ではあるが、それでも先代のときと比べると、収益は半分以下にまで下がっている。

一室へと通され、

「レイザードの解放は非常に困難です」

イリウスの第一声がそれだった。予想していなかったわけではな

いが、改めてそう言われ、現実を見せられた思いのセリアである。

「……望みは、まったくないのですか？」

するとイリウスは小さく笑った。

「それならば不可能と申し上げますよ。私は負ける戦いはしません。父とは違う手段をとります」

イリウスは続ける。

「困難な理由を申し上げましょう。現在のレイザードは、ただカルファラを追い払えば解放されるわけではありません」

「……はい」

イリウスが何を言わんとしているのか、わからないセリアではない。

カルファラを追い払うだけでは、レイザードはいずれ必ず滅亡する。

変える必要があるのだ。

その政権を。即ち王を。

「セルベス政権を打倒し、カルファラを追い払って、ようやくレイザードは解放されます」

「はい」

「ですから我々が行おうとしている戦いは、独立戦争であり、同時に謀反でもあります」

セリアはうなずく。

「そしてこの戦争に勝利するためには、殿下、あなたという存在が必要不可欠なのです」

「私、ですか？」

不思議そうに聞き返すセリアに、イリウスは微笑んだ。

「やはり、殿下はご自分のことをあまりご存じではないようですね」
「？」

「レイザードの民は皆、あなたのことが大好きなんですよ？　そして諸侯においても、私の呼びかけに応じる者はいないでしょうが、あなたの呼びかけであれば立ちあがる者が必ずいます」

「……私は、一度皆に背を向けました。そのような者がそこまで信頼されているでしょうか……」

「いいですか、セリア様」

イリウスの声は心底嬉しそうだった。

実は彼の心中には、一抹の不安があった。それはこの数年で、セリアが変わってしまったてはいないかということであった。

しかし、どうやらその心配は杞憂だったようである。根は昔のままのセリアがそこにいた。その事実が嬉しかったのである。

「もしもあなたという存在がいなければ、レイザードの各地で民衆が暴動を起こしていますよ。しかし私の知る限り、そんな話は聞いたことがありません。皆、いつかあなたが帰ってきてくれると信じて、過酷な状況の中を生き抜いているのです。レイザードがまだ滅びていないのは、あなたという存在が、皆の胸の中に希望としてあるからです」

「……」

「この国をお救いください。そして私たちをお導きください。セリアシュリン様」

イリウスはその場に片膝をつき、右手を胸に当てて頭を垂れた。
マリベルもまた、それに倣う。

「私は……」

覚悟はすでにできている。
何を迷うことがあるうか。

「私は、レイザードを解放するために、ここへきました。ただ、私自身は無力です。ですから一人ではどうすることもできません」

そう言つと、セリアもまた片膝をつき、頭を垂れた。

「どうかお願いします。私に力を貸してください」

イリウスはさらに深く頭を垂れ、

「今こそ確信しました。私はこのときのために生きてきたのだと。
このイリウス、身命を賭してセリアシュリン様に忠誠を誓います」
「同じくマリベル。この身果てるまで、セリアシュリン様とともに」

こうして、解放への序曲が始まった。

しかし彼らはまだ知らない。混沌とした冥き闇もまた、水面下で
ゆっくりと動き始めていることに。

十三章 任務

翌朝、まだ夜が明ける前にセリアは目を覚ました。

「……」

あまり眠れなかった。

久しぶりにふかふかのベッドで寝たということもあったが、何よりこれからのことが気になって仕方がなかった。

一言でレイザードの解放と言っても、果たして上手くいくのだろうか……。

具体的な方法は？

こちらの兵力は？

軍資金は？

考えたらきりが無い。

セリアは服を着替えると、剣を腰に提げた。

思えば傭兵生活は、剣と共にあった。

剣を手放さず眠ったときも幾度となくあった。

そんな生活のせいで、いつの間にか剣を身につけていないと落ち着かない体質になってしまっていたのだ。

しかしこれからは、剣士としての腕前よりも、王族としての器が必要とされるであろう。皆の希望に応えられるだけの資質が、果たして自分にあるだろうか。

部屋には、いかにも高貴な衣服がいくつか置かれていた。

昨晚イリウスに、好きな服を着てくれて構わないと言われていたが、今はまだ、着る気にはなれなかった。

窓の外がやや明るくなってきた。もうすぐ夜明けだろう。

そういえばイリウスやマリベルに、青年のことを話さねばなるまい。

さて、何と話したものやら。

などと思案しながら、セリアは何気なく窓の外を見やった。その瞬間、目が点になった。思考が停止して、目の前が金色になった。やつのことで、残った理性を総動員させて意識を覚醒させると、一度目をぎゅっと瞑り、そして再び見やった。

「っ！！！」

——窓の外には青年がいた。

我ながらよく叫ばなかったと自分を褒めてやりたい。

セリアは、どうしてここがわかったのだろうか、とか、この部屋は屋敷の三階だから、地上からかなりの高さにあったはずだ、とか、よく見れば青年は宙に胡坐をかいていないか、とか、色々とかにかく色々と言いたいことはあったが、とりあえず窓を開けてこう言った。

「おはようございます、ルイ」

「おう」

「どうぞ、座ってください」

「ん」

何とも劇的な登場を果たした青年は、セリアに促されて椅子に座

った。セリアもまた、対面にある椅子に腰を下ろした。

「……あ……えっと」

言いたいことは色々あるはずなのだが、言葉が出てこなかった。

しばらくの間、沈黙が続いた。何かを言おうと言葉を探しているセリアを面白そうに見つめていた青年は、やがて口を開いた。

「上手くいったか？」

「あ、はい！」

「そうか。よかったじゃねえか」

「はい。……ですが、これからが始まりです。それなので、ルイのことを皆に紹介しようと思っているのですが」

ルイは、ふむ、とやや考える素振りを見せた。

「まあ、そうしたいんなら別に構わんが、部外者が介入することを嫌う奴もいる。俺のことは話さない方がいいかもしれんぞ」

この戦いは独立戦争でもある。つまり、レイザードの人間で解決すべき問題なのだ。したがって、こういった戦いに参集する人間は、レイザード以外の人間の介入をあまりよく思わない可能性がある。それが原因で内部に亀裂が生じたならば、解放どころの話ではない。

「でも、ですから今の内に紹介しておきたいのです。後から、それこそさらに同志が増えてからよりは、今の内に済ませておいた方がいいと思うのです」

「……そうか。まあ俺も、この町の領主とは一度話したいからな」「イリウス殿とですか？」

「イリウスってのか。さつき外から見てきたが、性格の悪そうな顔してやがるな」

「ふふ」

何となくわかる気がして、セリアは小さく笑った。が、すぐに青年の言葉に疑問を感じて尋ねた。

「イリウス殿はもう起きていたんですか？」

「部屋から明かりが漏れてたからな。何か考え事してる感じだったが、あの分だと寝てねえな」

「そう、ですか……」

セリアは押し黙った。

やはりレイザード解放の困難さに頭を痛めているのだろうか。しかしそれならば、なぜ自分に何も言ってくれないのだろう。

「イリウス殿は、一人で悩まれているんだと思います。私が不甲斐ないものですから……」

「あの男がどんなことで悩んでるのか知らんが、それをお前に言わないのは、お前が不甲斐ないからじゃないと思うぞ」

「そう、でしょうか。ですが、それならどうして」

「単なる男の意地だな。セリア、お前だったら、一回りも年下の子供に自分の悩みを相談するか？」

「それは……」

「少なくとも、お前が不甲斐ないからとか、頼りないからっていう理由はないと思うぞ。意地か、あるいは——」

「あるいは？」

青年は椅子から立ち上がり、窓の側まで歩いていった。それと同

時に、廊下を誰かが行き来する気配がし始めた。恐らく使用人たちが起き出したのだろう。

「ルイ？」

青年は静かに窓を開けると、

「——あるいは、お前には言えないような内容か、だ」

やや沈んだ声色で語った青年に疑問を覚えたセリアだったが、それを問う前に、青年がさらに続けた。

「また後でくるわ。今度は正面からくるから、俺のことを話すんだ。つた話しておいてくれていいぞ」

「あ、はい、わかりました」

セリアが返答すると、青年は、じゃあな、と言って外へ飛び出した。すぐにセリアが窓へ走り寄ったが、そのときにはすでに、青年の姿はどこにもなかった。

それからしばらく経って、部屋に運ばれてきた朝食はちょっとしたご馳走であった。

あっさりとした温かなスープをはじめ、肉と野菜を詰めたパイ。たっぷりと熟成させたチーズ。そして新鮮な果物。空腹というわけではなかったが、温かな料理が醸す匂いに食欲を掻き立てられ、すべて平らげてしまったセリアである。そして使用人が再びやってきて、食べ終わった食器類を持っていった。

マリベルとアテルがやってきたのは、それからちよつと後のことであつた。

——トントン

扉がノックされ、

「姫様、マリベルです。入ってもよろしいですか？」

「はい、どうぞ」

扉が開かれ、マリベルが姿を現した。大鷲の紋章が刺繍で施されたローブを着込み、一流の魔術師たる風格を醸している。ちなみに大鷲の紋章を身につけられるのは、全十五階梯から成る魔術師の階梯の内、十階梯以上の者のみである。

「よくお眠りになられましたか？」

「ええ、大丈夫です。それより、昨日は本当に助けられました。アテルにもお礼を言いたいのですが、昨日は何分、まだ自分の中で整理がついていませんでしたので」

「姫様、私どものことはお構いなく。それより、イリウス様がお伝えしたいことがあるそうです」

「わかりました。実は私も、皆に話したいことがあります」

部屋から出るとそこには、眠そうな目をしたアテルがいた。どうやら朝が弱いのは変わっていないらしい。

「おはよお」

「おはようございます、アテル。昨日はありがとうございました」
「いいよ、そんなの」

アテルはぷいっと目を逸らす。
セリアは微笑みながら、

「では、行きましょうか」

「まずはこれを、ご覧ください」

そう言つてイリウスがテーブルに広げたのは、一枚の大きな羊皮紙であつた。

それは、レイザード国内の地形が詳細に記された地図だつた。

山や川、森、町、街道などをはじめ、どの貴族がどれだけの土地を治めているのかなどについても記載されている。

イリウスは静かに、地図上の一点を指差した。

「……ゼナン……バルト騎士団ですか」

イリウスは素直に尊敬の眼差しを送つた。

「さすがに、慧眼ですね」

一呼吸置いて、イリウスはさらに続けた。

「ご存じの通り、このシャトリナから西へ三日も行けば、ブエティノ卿が治めるゼナンがあります。このゼナンの解放を以て、つまり

ブエティノ卿の居城の制圧を以て、解放戦争の狼煙を上げます」

「ブエティノ卿……？」

聞いたことがない名前だった。少なくとも二年前までは、ゼナンの領主はその者ではない。

セリアの疑問を察したマリベルが言った。

「ブエティノ卿は、カルファラからきた執政官の一人です」

「……なるほど」

「殿下、正直なところを申し上げますと、現状の我々の戦力だけでは、ブエティノ卿と真っ向から戦っても勝ち目は薄いでしょう。兵の数だけで言えば敵は倍以上です」

「……」

戦は兵の数だけで決まるものではない。しかし、自軍の数倍もの敵と相対しながら、恐怖心を抱かずにいられる兵が果たしてどれだけいるだろう。一たび恐怖に飲み込まれたなら、それを振り払うことはまず不可能。そしてその恐怖は、他の兵に伝染する。

結果、敗走は必至である。

また、ゼナンは見晴らしの良い草原地帯がほとんどの割合を占めている。したがって、伏兵や別動隊、あるいは奇襲といった戦術がとりにくい。

「そこで、殿下に一つ、お頼みしたいことがあります」

イリウスが切り出した。

「何でしょう？」

「まず私の私兵が、真っ向からブエティノ卿の居城を攻めます。恐らく両軍が激突するのはルベア大草原になるでしょう。殿下はその

間、密かにゼナンに潜入して騎士団を動かしていただきたいのです。そしてブエティノ卿の軍を背後から急襲してください」

「潜入には私が同行します」

二人の視線の先で、しばらく熟考していたセリアだったが、やがて、

「わかりました。参りましょう」

イリウスは無言で頭を下げた。

「本当なら、このような危険な任務を殿下にお頼みすること自体間違っているのですが、私やマリベルでは、騎士団は動きません」

「私にそのような気遣いは無用です。——ただ、私からも一つだけお願いがあります」

イリウスとマリベルは互いに顔を見合わせた。

十四章 来訪者

「危険です」

青年のことを話した結果、イリウスの感想がそれだった。マリベルは無言で難しい顔をしている。唯一アテルが、大人二人が考え込むその様子を、きょとんとした表情で見比べていた。何が危険なの？ といった感じだ。

「その……ルイと仰いましたか、その人物が殿下の命の恩人だということとはよくわかりました。このことに関しては、どれだけ礼を尽くしても尽くしきれません。ですが、それだけで信用に足りる人物かどうかを判断するのは早計かと思われます。極端な話、刺客の可能性も否めない」

セリアに近づくために、偶然を装ってセリアを助けた。その可能性がないと言い切ることは確かに難しいだろう。

しかし、セリアには確信があった。

「もし仮にルイが刺客であるなら、私はもうこの世にはいません。私がいまここに生きているという事実が、彼が刺客ではないことの証です」

「……しかし、仮に刺客ではなかったとしても、その者の情報がありにも不足しています。名前以外、すべてが不明では信用のしようがありません。殿下には申し訳ありませんが、その者とはもうお会いにならない方がよろしいかと……」

イリウスとて悪気があるわけではない。イリウスはイリウスで最善を考えている。だからこそ、危険分子の可能性がある芽は、早めに摘んでおきたいのだ。

とそこで、しばらく熟考していたマリベルが、静かに口を開いた。

「姫様、私は姫様のご判断を信じたく思います」

「僕も」

イリウスは二人の方を向いた。

「二人とも、正体のわからない者を味方に加えることがどれだけ危険か、わからないわけではないだろう？」

「勿論、イリウス様の仰ることは最もなことだと思います。そのご判断は、確かに最善の判断でしょう」

「だったらなぜ——」

「では逆にお聞きますが、イリウス様は姫様を信用されていないのですか？」

「——何？」

「その、ルイという青年を信用するかしないかを今決めることも早計でしょう。とにかく会ってみないことにはわかりません。ですが、姫様が信用しておられる人物ですから、信じるに値する相手ではないでしょうか？」

「……」

イリウスは小さく呻いた。

痛いところをつかれた。

「昨夜、我々は姫様に忠誠を誓ったはずです。それならば、主君の判断を信じて戦うことが我らの務めではないでしょうか？——ただ、確かに危険ではありません。しかし、まずは会ってみましょう。その上で我々が危険と判断したなら、そのときは姫様、御再考願います」

イリウスはまだ、やや不服そうであつたが、やがて納得したように静かに頷いた。

「我が俣を言つて申し訳ありません。ですが、会えばわかると思います」

「わかりました。それでその若者は今どちらに？」

「もうすぐここへ来ると思います」

「この屋敷にですか？」

「ええ、この町にきてすぐに別行動をとつたのですが、そのときに私が頼んだのです」

本当は今朝、部屋で約束したのだが、それを正直に言つと色々と面倒なことになりそうなので適当に誤魔化したセリアである。

《そういうばお金を稼ぐと言っていたけれど、ちゃんと稼げたのだろつか……》

今朝の様子からすると、空腹で困つてゐる感じはしなかったが。

「ねえ、あの話なくていいの？」

アテルが、母親の服を引っ張りながら尋ねた。マリベルは、確認を求めるようにイリウスを見やった。イリウスは小さく頷くことでそれに応えた。

「率直に申し上げますが、姫様は二種類の敵にお命を狙われています。まず一つは、昨晚この屋敷の近くで襲撃してきた者たちですが、彼らはファルナス王子の手の者とみて間違いないでしょう」

「……兄上、ですか」

何とも言えない、寂寞とした表情を浮かべたセリアである。

昔からファルナスとジラードの両王子は、セリアと仲が悪かったというより、二人が一方的にセリアを嫌っていた。諸侯や民から人気のあったセリアは、二人の王子にとって煙たい存在以外の何物でもなかったのだ。

「しかし、こうも大胆な手を打ってくるとはな……」

イリウスが言った。

「私が邪魔だったのでしょうか」

「彼らにとつては、確かにそうかもしれませんが。ですが殿下、あなたは現に王族の直系であり、第三位の王位継承権の持ち主なのです。そのあなたを闇討ちし、何事もなかったかことにするには、並大抵の手腕では不可能です。死体でも見つかるうものならまず無理です。かと言って堂々と討伐するには、大義名分が必要です。例えば反乱軍の首謀者としての汚名を着せる、といった具合にです」

セリアははつとした。

「もしや自分が国外へ逃げなければならなかった理由というのは……」

「もしやイリウス殿が二年前、私を国外に逃がしたのは」

「ええ、そういった動きが出てきてからでは遅いので、私の父上がレジスタンスを組織する前に国外に逃げていただいたのです。いくら何でも、いないはずの人物に罪を着せることはできませんから」

「そう……だったのですか」

「それよりも殿下、問題はもう一つの敵の方です。あなたを闇討ちし、何事もなかったことにできるだけの力を持った組織が動いているのです」

「何度か私を狙ってきた者たちですか？」

「そうです。私も、マリベルから聞いたときは耳を疑いました。まさか、あんな連中が動いているとは……」

「それは、何者ですか？」

「それは――」

と、そのときだった。

トントン。

「お取り込み中のところ失礼いたします。イリウス様、お客人が見えておりますが、いかがいたしましたでしょうか？」

ネハイルの声であつた。

「ふむ、どうやら例の青年がきたようですね」

「ここまで来てもらいます？」

と、マリベル。

「いや、我々から行こう」

四人は部屋を後にした。

ネハイルに先導されるようにして、屋敷の入口へやってきた四人であつた。

「それでは、お開けします」

ネハイルが扉に手をかけた、まさにそのときだった。

「ん？」

マリベルが疑問の声を上げた。続いてアテルが眉をひそめる。

二人には微かだが声が聞こえていた。それは二人が魔術師だからこそ聞こえたと言っているだろう。

「呪文……？」

マリベルのその言葉から一瞬遅れて、セリアは扉の向こうに何か気配のようなものを感じた。

人の気配ではなく、何というか、そう、まるでエネルギーのような、そんな気配。

セリアの右手が、自分でも気づかない内に、剣に伸びていった。

《何だ……？》

何かがおかしい。何かが、危険だと告げている……。

《——危険？ ルイがきているのになぜ？ ——わからない。どう
いうことだ……？》

頭の理解が追いつかない。

しかし、身体はわかっていた。

いつの間にか自分の右手が、剣の柄を握っていることが何よりの証拠ではないか。

セリアは理解した。

《……そうか、そういうことか》

——ルイじゃない。

「伏せる！」

セリアが叫んだ刹那、凄まじい衝撃波が扉を吹き飛ばした。マリベル、アテル、そしてイリウスは、セリアの声に反射的に身を屈めた。自分のわずか数センチ隣を、無残な姿となった扉が飛んで行ったときには、さすがにセリアも冷やりとした。

「姫様！」

「殿下！」

「無事です」

マリベルとイリウスの声に、セリアは静かに短く答えた。言動の一つが、致命的な隙を生み出すこともある。

いつでも抜刀できる体勢にあったセリアであったが、扉があった場所に佇んでいるその者を見た瞬間、全身が総毛だった。

その者は、黒一色の装束に身を包んでいた。背は高く、一見ひょろつとした印象を受けるが、それは身体から無駄なものを極限にまで削ぎ落としたからであろう。蠟のような血色のない肌には、何やら不可解な紋様が記され、気味の悪さを際立たせていた。そして、一切の感情が読み取れない双眸は、異様なほどにぎよろつと剥き、セリアたちを映していた。

セリアはの全身を強烈な震えが襲った。

できることなら、今すぐにも剣を抜き、飛びかかっていきたい。しかしそんなことをすれば最後、確実に殺される。飛びかかる前からそんな光景が浮かぶようでは話にならない。

歯を強く噛み締め、震えと衝動を諫める。

誰一人喋らない。――否。言葉を発せるような空気ではない。まるで空間そのものが凍りついているかのようだ。呼吸をするのさえ体力を使う。

と。

「くっ……」

イリウスが小さく呻き、膝をついてしまった。

当然だ。イリウスは武人ではない。戦闘訓練を受けているわけではないのだ。むしろこの耐え難い威圧感の中で、よく今まで持ったものだ。恐らく、主を守らねばならないという忠誠心が力となったのだろう。

時間にしてほんの数秒であったが、セリアたちにとっては数時間にも及ぶ体感時間であった。

「！」

その者はゆっくりとした動作で右手を掲げた。次いで一瞬だが、得体の知れない響きを孕んだ言葉が発せられた。マリベルが言っていた『呪文』であろう。

すると、先ほど感じたエネルギーの気配がその掌に傾注していく。それに伴って掌周辺の空間が陽炎のように歪んでいった。

魔術の発動を見たことがないセリアではない。二年も傭兵をしていれば、魔術師と戦うことは幾度となくあった。

しかし、今日の前の敵が発動させようとしている魔術は、セリアが今までに戦ってきた魔術師たちのそれとは格が違う。

《——まずい……っ！》

焦燥高まるセリアの隣から呪文が聞こえたのはそのときだった。

「——アソリユート結界防壁！」

不可視なる壁がマリベルを中心として円形状に展開された。セリアは力強い波動を感じた。しかし安心する暇もなく、襲撃者の掌から凄絶な衝撃波が放たれた。

目に見えなくともわかる。それはまさに激烈な力の奔流であった。全てを飲み込まんと、まるで津波のように襲い来る。

衝撃波はマリベルが張った結界に激突し、両者の魔術は一瞬拮抗したかに見えた。しかしすぐに。

「くっ……っ！」

マリベルが苦しげな表情を浮かべた。

《強い……》

魔術の強弱は、一般的には呪文の長さで決まると言ってもよい。故に術の威力を上げるためには、長い間呪文を唱えなければならない。しかし実際には、それだけでは説明がつかない部分もある。例えば二人の魔術師が同じ時間呪文を唱え、同じ魔術を放ったとしても、

その威力が同じとは限らない。そういった形で表れる差は資質として見なされているのが現状であるが、要は説明されていないのである。

襲撃者が唱えた呪文は一瞬だった。しかし、にも拘らずこの威力。

《結界が、持たない……っっ！》

自分で張った結界だ。どれだけの攻撃を防げるのかは熟知している。

襲撃者が放った術は、この結界の耐久力を軽く上回っていた。

《これほどの魔術師……もしや……っ》

ある答えに辿り着いた途端、マリベルが見せた一瞬の動揺。その瞬間、襲撃者が放った魔術の威力が跳ね上がった。

「なっ！？」

衝撃波はいとも簡単に結界を打ち砕き、マリベルに炸裂した。咄嗟に両腕を交差したマリベルだったが、衝撃波によって大きく弾き飛ばされ床に叩きつけられた。

「母上！」

アテルが駆け寄った。

マリベルは激痛に顔を歪めていたが、意識を失ってはいなかった。しかし立ち上がることはできず、身を起こすのが精一杯のようだ。

「母上……」

こんなに弱った母を見るのは初めてなのだろう。アテルは心配そうに母の腕を握っている。

そんな二人の背後から、呪文が聞こえた。

アテルははっとして振り向く。

襲撃者が再び、マリベルに向けて術を放とうとしていた。

その目に一切の躊躇いはない。無慈悲に、ただ淡々と、まるで機械作業のようにこちらを殺そうとしている。

「……アテル、逃げなさい……」

「でもっ」

「私が、時間を稼ぎます。だからその間に、早く……」

「そ、そんなの……」

アテルが躊躇ったのも無理はない。マリベルは立ち上がることでできないほどに弱っているのだ。この状態では満足に術を行使することなどできようはずがない。

アテルとて魔術師だ。それぐらいのことは見ればわかる。

しかし、もしも今、マリベルに残された手段の中で、時間を稼ぐ方法があるとすれば……。

「やだ」

その声は、幼子が駄々をこねるようなものではなかった。言葉自体は子供っぽいところがあるが、それに込められた意思の強さはマリベルでさえはっとするほどだ。

「アテル……」

アテルはゆっくりと歩き出していた。

——母を守るために。

結果的にその行動が、吉と出た。

《アテルが危ない……！》

術がアテルに向けて放たれようとしたそのとき、セリアは無意識の内に剣を抜き放っていた。

抜刀とともに振るわれた剣が風の刃を生み出し、襲撃者を猛襲する。

狙うは急所。当たれば確実に命はない。仮に急所から外れたとしても、かなりの重傷を負うことは間違いない。

しかしである。

襲撃者は巧みに身を反らし、風刃を躲してしまった。

《太刀筋を見切られた……？》

恐らく、この剣の情報がすでに伝わっていたのだろう。しかし情報だけあっても、そこに腕が伴わなければこうはならない。

魔術の腕前はマリベルを凌ぎ、そしてセリアの太刀筋を一瞬で見切れるだけの眼力。間違いなく剣士としても一流である。

——打つ手がない。

しかも今の攻撃によって、襲撃者の攻撃対象がアテルからセリアへと変わっていた。

「くっ」

魔術を嗜まないセリアにとって、魔術を防ぐ術はない。
生き残るには躲すしかない。

《躲す……？ 躲せるのか？ この距離で……》

果たして自分に、そこまでの身体能力があるのか？

戸惑うセリアに、襲撃者は容赦なく魔術を放った。

苛烈にして甚大な力はまるで荒れ狂う龍のようにうねり、それが
幾重にも重なり膨大な波となって押し寄せる。

躲せる隙など、どこにもなかった。

《ルイ……っ》

——その瞬間、セリアの視界に二つの影が飛び込んできた。

十五章 来訪者？

あれほど強力に感じられた魔術が一瞬にして霧散していた。

当たった？ いや、当たっていない。正確には青年に当たる直前に、衝撃波はまるで霧のように消えてしまったのだ。

そして青年はというと、セリアを守るように立ちはだかっている少年の頭を撫でていた。

そう、セリアを守るように飛び込んできた影の一つはアテルだったのだ。

そのアテルは、いまだに何が起きたのかわからない状態で、されるがままに青年に頭を撫でられている。

「坊主、よく頑張ったな」

「だ、誰？」

アテルはまだ困惑を隠せない様子である。

「ああ俺か？ 俺はルイだ。セリア、いやセリアシュリンから聞いてなかったか？」

「あ……うつん、聞いている」

「そうか、なら話は早い。後は俺に任せておけばいい」

「でも……」

「向こうで倒れてるのはお前の身内か何かだろう。行ってやれ」
「う、うん」

アテルはマリベルのもとへ駆け寄っていった。

「ルイ……」

「遅れてすまねえな」

何を言う。

何を謝ることがあろうか。

セリアは小さく首を横に振った。

「とんでもありません。来てくださって感謝しています」

と、そこで。

「貴殿がルイ殿か？」

イリウスであった。

青年の出現によって、いつの間にか場の威圧感が消えていた。そのために、彼は立ち上げられるまでに回復していたのだ。

そんなイリウスに視線を移した青年は、

「あの爺さんは、格好から見て執事か何かだと思っただが、お前にとってはどうでもいい人間なのか？」

青年はイリウスを見ているのではなかった。イリウスの向こうで、壁にしな垂れかかるようにして気を失っている老人を見ていたのだ。

それは、襲撃者が放った第一波で吹き飛ばされたネハイルであった。

「ネハイル！」

イリウスが走っていく姿を見て、青年はやれやれと肩をすくめた。

「さてと、待たせたな」

青年は襲撃者に向き直った。

「随分と勝手なことをしてたみたいだが、覚悟はできてるんだろうな？」

すると襲撃者は、喉の奥の方でくっくつと笑った。

「そうか……お前が障りか」

襲撃者が初めて言葉を発した。

「障り？」

「障りは消されなければならない」

「んー？ てことはお前、俺を殺りにきたのか」

襲撃者は返事の代わりに呪文を唱えた。冥く低い声が紡がれる。ここまでは今までと同じだった。

——しかし。

「なっ、に……っ？」

襲撃者は、あからさまに動揺した声を発した。

それもそのはず。呪文を詠唱したにもかかわらず、その右手には何の力も集う気配がなかったからだ。

再び呪文を唱えるが一緒だった。

何も起こらない。

「馬鹿な……」

「確かに魔術とやらはよくできてるが、それを扱う本人が未熟すぎる。お前が何の対策も取らんからこつちから干渉し放題だ。せめて魔力のコントロールぐらいできるようにしてから出直してこい」

しかし当の本人はというと、青年の言葉などまったく聞こえておらん様子で、何度も何度も呪文を唱えていた。

無論、何も起こらない。

「くそっ、なぜだ、なぜなんだ！」

もはや錯乱に近い状態である。

それもそのはず。呪文を唱えても何も起こらないということとは、魔術師にしてみればありえないことである。言うなれば、呼吸をしているのに空気が肺に送られないようなもの。パニックは必至であろう。

「うるせえ野郎だ」

青年はため息をついてセリアに向き直った。

「怪我はないな？」

「は、はい、大丈夫です」

その後、

「ふ、ふはははははははっつー！！」

何やら歡喜に満ちた笑い声が青年の背後から聞こえてきた。

あまりの事態に、精神の均衡が崩れたのだろうか。

しかし見てみれば、掲げられた右手には莫大なエネルギーの気配があるではないか。

術が発動しようとしている。

「ルイ！」

「心配すんな。——おいおっさん、そいつあやめた方がいいと思うがな」

背を向けたまま注意を促す青年。しかし、もはや術を放つ気満々の襲撃者である。

「何をほざくか！ 死ねええええ！」

しかし襲撃者の思惑とは打って変わって、その絶大な力の奔流が青年に向かって飛ぶことはなかった。

「は？」

気の抜けた襲撃者の声を余所に、力の奔流は解放を求めてあらゆる方向へ飛び交おうとする。しかしその力は、それ以上の力によって抑えつけられているかのように微動だにしない。やがて限界まで圧迫され、極限に達した力の奔流はバランスを失い暴走——炸裂した。

まるで大気が弾けるような、強烈な破裂音が響き渡った。しかしセリアのところにはそよ風程度の微風しかこなかったのは、それもまた青年が何かをしたのだろう。

爆心地で、自らの魔術による衝撃をともに食らった襲撃者は、

全身から蒸気を上げながら、声もなくその場に倒れ伏した。

こうして、襲撃は幕を閉じた。

幸いにもネハイルは腕の骨折と軽い脳震盪だけで済んだ。

しばらく安静にしていたところすぐに気がつき、イリウスが半泣きで抱きついたのだが、青年によって引き剥がされた。

青年曰く「怪我人に何しやがる」である。

至極最もな意見だったので、イリウスは素直に従った。しかし青年がその骨折に触れるだけで治してしまったときには、一同驚愕を通り越して啞然としていたものだ。

怪我の度合いで言うなら、ネハイルよりもマリベルの方が重傷であつた。

魔術による傷は、剣などの武器によってできた傷とはまた異質である。

まず治りが遅い。普通の傷と比べて、約三倍もの時間がかかると言われている。

しかし魔術には治癒の術も存在する。一流の魔術師であるマリベルは、自身に治癒の術を行使することで事なきを得た。無論、一気に万全な状態にまで回復するわけではないが。

さて、そんなこんなで再びイリウスの部屋に集まった一同。今度は青年がいる分、青年以外の皆は若干緊張気味の様子で、椅子に着席していた。

しばらく沈黙が流れていたが、セリアが口火を切った。

「ルイ、先程はありがとうございました」

椅子から立ち上がり、頭を下げようとしたセリアであったが、

「いや、さっきの奴の口振りからすると、どうも俺を狙ってきたらしい。それならこの一件、俺に責任があることになる」

「そんなこと！」

とんでもない、と言わんばかりのセリアである。

「さっきの奴も再三狙ってきた奴らと同類と思うが、俺を消さない限りお前を殺すことはできんと判断したんだろ」

「……仮にそうだとしても、ルイに責任があるとは思いません」

「失礼だが」

イリウスが口を挟んだ。

セリアは静かに着席し、青年は視線だけをイリウスに向けた。

「貴殿——ルイ殿が個人的に何者かに狙われているという可能性は？」

「イリウス殿、恐らくそれはあり得ません」

「どうしてそう言い切れるのです？」

「それは……」

事実をそのまま言うとなると、青年は異世界から来てまだ日が浅い。したがってこの世界の誰かから狙われるなどということはあり得ない。である。

しかし。

《異世界から来たなどと、イリウス殿は信じまい。——どうしたものか……》

セリアが思案していると、

「私から一つよろしいですか？」

マリベルである。

顔色が大分良くなっているところを見ると、かなり回復してきているようだ。

「先程の襲撃者の件ですが、あの魔術の腕前から推測しても、ただの殺し屋とは思えません」

「……ふむ」

イリウスは続きを促した。

「仮にルイ殿が何者かに狙われていたとしても、あれほどの魔術師が動くとは考えにくいと思われます。階梯で言うなら十二、いや十三の域にまで達しています。一介の殺し屋のはずがありません。恐らく背後には、例の組織があると考えられます」

「……確かに、そう考えるのが自然だな」

「マリベル、その例の組織というのは、私を狙ってきた者たちのことですね？」

「そうです」

マリベルは、イリウスに確認をとるように目配せした。

イリウスは静かに頷くと、マリベルに代わって話し始めた。

「殿下は『死神の手』と呼ばれている組織をご存じですか？」

「……聞いたことはあります。ギルドの一種だと思っていましたが」

ギルドとは、傭兵の中には、より効率よく仕事を遂行するために、複数人で徒党を組み、名乗りを上げる者たちがいる。その規模は大小様々だが、大きいところともなると、その団員は千人を超える。そういった集団を総称して、ギルドと呼ぶのである。

「いえ、ギルドとは少し違います。ただ、もしかしたら最初はギルドだったのかもしれませんが。ですが今は、大陸各地に支部が存在するほどの巨大な暗殺組織です」

セリアは小さくため息をついた。

厄介な相手だということより、そんな組織に自分の始末を依頼した実の父親に対して、もはや悲しいというより呆れた心境であった。

「正直なところ、私は『死神の手』の力を見誤っていました。正当な訓練を積んだマリベルなら、奴らの襲撃を防げると踏んでいたのです」

「姫様とお会いした酒場に襲撃してきた者たち程度であれば、私で十分対処できたのですが、先ほどの術者は次元が違いました」

セリアははつとして、思わず尋ねた。

「酒場におられた方々は、無事ですか？」

「ええ、怪我を負った者もいましたが、全員命に別状はありませんでした」

セリアはほつと安堵の息をもらした。

よかった。

自分が原因で他の誰かが死んでいくことほど、嫌なことはない。
マリベルはさらに続ける。

「次に襲撃があるとすれば、先ほどよりも力のある術者が来るはず
です。そうなれば、たとえ私が万全の状態で迎え撃てたとしても防
ぎ切れるものではありません」

マリベルは十一階梯の魔術師である。仮に先ほどの襲撃者が十二
階梯の魔術師だったとするなら、万が一にもマリベルに勝ち目はな
い。たかが一階梯の差に思えるが、そこには壁があるのだ。

「しかし、かと言って軍勢を護衛につけるわけにもいかない。必要
なのは千人の兵ではなく、一騎当千の力を持った者」

そう言うといリウスは立ち上がり、青年の前まで歩み寄った。両
者の視線がしばし交錯する。――が、やがてイリウスはその場にゆ
っくりと腰を下ろしていき、片膝をつけた。

「ルイ殿、殿下をお守りしていただけないだろうか」

そう言っ て頭を下げた。

「私からも、お願いいたします」

マリベルもまた、青年の前で、イリウスに倣うようにして頭を下
げた。

貴族ともあるう者が、素性もわからぬ相手にここまですることは
まずありえない。

そもそも決定的に身分が違うのだ。やれと言われてもそう簡単に

できるものではない。

「……」

青年はしばらくの間、黙ってイリウスとマリベルを交互に見据えていた。その目は、やや呆れているようにも見えた。

二人への視線はそれまでとして、青年の目は、先ほどから始終静観の姿勢を取っているアテルへと移っていった。

そんな青年の視線に気づいたアテルは、驚いたように何度か目をしばたかせた。

「坊主、名前は？」

イリウスとマリベルは、一体何を言い出すのかと、膝をついたまま青年を見上げた。青年はそんな二人の様子など全く意に介さず、面白そうにアテルを見ている。

「さっき俺の名前は言ったよな？ 訳あって今は名前しか言えんが、知りたかったらセリアから聞くといい。……あ、セリアってのはわかるな？ 呼びやすいから勝手にそう呼んでるんだが」

アテルは頷くことで応えた。

「——よし、次はそっちの番だ」

「ぼ、僕はアテル。魔術師だよ」

普段は高飛車な発言をすることも多いアテルだが、今は珍しく、やや緊張した面持ちである。

「アテルか。ならアテル、一つ質問だ」

「え？」

「お前から見て、セリアはどう見える？」

質問の意味がよくわからなかったアテルである。無論それはイリウスとマリベルも同じであろう。

青年は一体何を聞こうとしているのか。

容姿？ 性格？ まさかそんなことではあるまい。

「すまん、わかりにくかったな。言い換えるとだな、セリアは自分で自分の身を守れないほど弱く見えるか？」

「うっん」

アテルは首を横に振った。

「僕なんかよりよっぽど強いし、たぶん、一対一でなら母上よりも強いと思う」

お世辞で言ったのではない。

実際にセリアと共に戦ったアテルは、事実そう思っていた。

セリアは魔術を嗜まないが、優れた身体能力と判断力、類稀な剣才がある。

それらを総合的に判断すると、十階梯という高位の魔術師である母よりも恐らく強いだろうと、アテルは見ていた。

青年はイリウスとマリベルに視線を移した。

「まあ、そういうことだ。お前らがセリアのことを大切に思ってるのはよくわかる。でもな、セリアはお前らが思ってるほど弱くない。これからもまだまだ強くなる。俺が保証する。——だから、もう少

し信用してやれ。お前らが信用しねえで、一体誰が信用するんだ？」
「我々とて、殿下を信用していないわけではない。ただ、万が一のことがあってからでは遅いのだ。そのためにも、どうかっ」

《頑固な野郎だ……。脳みそ岩でできてんじゃねえだろうな》

青年は半ば面倒くさそうに、

「じゃあ何か？ いざ合戦が始まったら、セリアにはどこか安全な場所から高みの見物でもさせるのか？ 飾りか？ セリアは」
「違う！」

飾りなわけではない。

共に戦う同志であり、希望だ。

「断じて飾りなどではない。殿下は、我々レイザードの民の希望だ。だからこそ、もし、万が一その光が潰えるようなことにれば……」

レイザードは滅びる。

これは予測ではなく事実。

ならばどんなことをしても、この希望の光を守らなければならないのは当然ではないか。

「イリウス殿、マリベル、ありがとうございます」

イリウスとマリベルは、はっとして顔を上げた。いつの間にかセリアがすぐ傍にいて、嬉しそうに笑みを浮かべていた。

「殿下……」

「姫様……」

「そんな顔をしないでください。私は本当に嬉しいんですよ？ 二人が私のことをどれほど大切に思ってくれているか、痛いほどに伝わってきました。ならば今度は私が、その思いに応える番です」

「こいつはすぐにでも飛び立てる。お前たちが、手を放しさえすればな」

セリアを大切に思うその気持ちが、いつの間にかセリアを縛ろうとしていた。

イリウスとマリベルにしてみれば、セリアを束縛しようなどという気持ちはないが、言われてみれば確かに、事実としてそうなりつつあったかもしれない。

それを指摘され、二人は何も言い返せなかった。

どこか、しゅんとした面持ちになった二人に、セリアは言った。

「ゼナンへ参ります。ルイ、一緒にきてもらえますか？」
「ん」

「殿下」

そのときのイリウスの表情は、あまり顔に出ないタイプのイリウスにしては珍しかったと、後々にセリアは語ったという。

賛成するわけでもなく、反対するわけでもなく、所謂どっちつかずの迷い多き表情。

どうすればいいのかわからなくて、答えを求めている子供のような顔。

セリアは内心面白可笑しかったが、顔には出さず、むしろ堂々と構えて言った。

「心配はいりません。私は大丈夫です」

傭兵として過ごした二年は、王族として宮廷暮らしをしていたときと比べ、天と地ほどの差があったが、その厳しい環境はセリアを一回りも二回りも成長させていた。

《そうか……。もういつでも、飛び立てる、か……》

嬉しくもあり寂しくもある心境。あえて言うなら、一人で眠れるようになった幼子のベッドの傍に落ちているぬいぐるみは、このような心境であろうか。

目が潤みそうになったイリウスは、頭を下げることで堪えた。自分もまた、成長しなければならぬ。

隣を見るとマリベルが、声を押し殺して泣いていた。

泣くのはマリベルに任せよう。ここで自分も涙すればセリアが困るだろう。

イリウスは顔を上げた。

「殿下、もう我が俣は言いません。共にレイザードを解放しましょう」

「無論です。そのために戻ってきたのですから」

セリアは迷いなく言う。イリウスもまた、力強く頷き返した。そして、その後もう一度作戦について詳しく取り交わし、その日の午後、青年とセリアはゼナンへ出立した。

十六章 魔術

バルト騎士団は総勢一千と兵の数は少数だが、選り抜かれた猛者ばかりの精鋭部隊である。

部隊の屯所はゼナンの南に位置し、その東には大森林が大きく広がっている。

もともとは森から出てくる魔物を討伐するために設けられた砦を、騎士団の屯所として改良し、使用しているのである。

当然のことだが、この砦には騎士しかいないため使用人などいない。

掃除、洗濯、炊事、全て自分たちでこなす。ちなみに女の騎士もいるが、女だからといって雑務が多く割り当てられることもない。

この砦では男も女も、男として、あるいは女としてではなく、あくまで一人の騎士として、常に戦いに備えているのである。

「入れ」

その声はやや年齢を感じるが、どっしりとした重みと包容力がある。聞く者を安堵させる声色であった。

「失礼します」

木製の扉が開かれ、大柄で逞しい体躯の男が部屋に入ってきた。歳の頃は三十前後。精悍な顔立ちに加え、鋼鉄の意志を感じさせる力強い目は、まさに戦士という言葉が相応しかろう。

「お呼びでしょうか、グラムド团长」

「うむ。わざわざ呼び出してすまん、ラインよ」

ラインを呼び出した白髪の子——グラムドは、椅子に座って、何やら書状をしたためている。

老人と言うには若干早い。だが六十には近いだろう。しかし、衣服の上からでもわかるが、鍛え抜かれた強靱な肉体は衰えを知らず、眼光も鷹のように鋭い。

無論それだけならラインも引けを取るものではないが、決定的に雰囲気が違う。何ともゆったりとした空気。それでいて堂々とした態度。無論それらは戦場でも揺らぐことはない。

たとえ形勢が不利であろうと、彼の指揮のもとであれば、騎士たちは各々の持てる力を存分に発揮できるに違いない。

「まあ座れ」

「は」

グラムドに促され、ラインは身近にあった椅子に腰かけた。

もともと小さな部屋だけに、大の男が二人いるだけでさらに狭く感じられる。もっと広い部屋もあるのだが、グラムドが「これで十分」と言っただけで聞かないのだ。

簡素な造りのベッドに、年季の入った机と椅子、そして古びた本がしまわれている本棚。それ以外で目ぼしいものと言えば、壁にかけられている絵画であろうか。

そこには、白銀の鎧を身にまとった女騎士が金色の髪をなびかせていた。優しい微笑をたたえ、静かに佇むその様は勇壮さに溢れ、神々しささえ感じる。

ラインがしばらくその絵を眺めていると、グラムドが言った。

「この絵は、わしはあまり好きではないから外したいのだが、先代

の騎士団長から譲り受けた代物でな、おいそれと外せんのだ」

「いい絵だと思えますが？ 神姫エルティアを描いた絵の中でも、これほどのものは滅多にないかと」

「だから嫌なのだ。美化され過ぎて人間味がせん。そもそも今から五百年も昔の人間だ。実際にはとんでもなく醜悪な女だったかもしれないぞ？」

「まあ、確かにそうかもしれませんが」

グラムドは一息つき、言葉を続けた。

「……しかし、英雄であることに変わりはない。レイザード建国の立役者の一人だからな」

「ええ」

「……時代はまた、英雄を求めているのかもしれない」

「時代？ レイザードではなくてですか？」

「……うむ」

グラムドは重々しく頷いた。

「ここ数年の間に、魔物の数が激減した。今でもちらほら見かけますが、それでも以前の三分の一ほどには減っている」

「増えるよりは好ましいことだと思いますが」

「確かに、魔物に襲われる人々も減った。しかしな、どうも気味が悪い。何か嫌な予感がしてならぬのだ」

「嫌な予感、ですか」

「わしらの知らぬところで、わしらの想像もつかぬような何かが、起こり始めているような、な。——なに、年寄りの戯言と聞き流しにくれて構わん」

「……」

「さて、無駄話はここまでとして、ラインよ、ちと頼まれてくれぬか？」

「は」

グラムドは、書き上げた書状を綺麗に折りたたみ、封筒に入れ、バルト騎士団の紋章である、二本の剣を交差させた紋様の刻印をもって封をした。

「これをブエティノ卿に届けてくれ」

すると、ラインの目が明らかに剣呑な光を宿した。

「あの男がまた何か言ってきたのですか？」

「団員を半数にしろと言ってきた。たかが魔物の討伐に千人の団員は多すぎるそうだ」

ラインは壮大な舌打ちをしたが、グラムドは面白そうに笑っている。

「団長、笑っている場合ではありませんぞ？　それでも二年前と比べると、皆に詰めている騎士は半数になっているというのに」

「ライン、この場にいないからといって、その者たちが騎士でなくなったわけではない。わしはむしろよかったと思っている。彼らはバルトの騎士として、レイザード国内のあらゆる場所へ派遣されていったのだ。たとえ国外にいたとしても、バルト騎士団が参戦するときは、我先に馳せてくるはずだ。——バルトの騎士であるお主なら、そうするのではないか？」

グラムドは笑っていた。微塵の疑いも持たず、確信しているかのよう。

事実、確信があるのだろう。グラムド自身がそうなのだ。だから、他のバルトの騎士もそうに違いない。これは能力や才能の問題とは違う。

信念の問題である。

騎士としての魂を生きる者であるなら、皆、そうするはずだ。それが、バルトの騎士のあるべき姿であるから。

ラインもまた然り。

彼は満足げに笑い、グラムドから書状を受け取った。

「明日の昼には戻ります」

「うむ」

ラインは丁寧に一礼すると、部屋から出て行った。

そしてその後しばらくして、グラムドもまた、団員の訓練に立ち会うため、部屋を後にした。

街道沿いには、商人たちが中心となつて興つた宿場町がある。とは言つても、町と呼べるほど大きな代物ではない。しかし長旅をする旅人にとっては、なくてはならない場である。

「ふういゝ」

満足げな溜息をもらしたのは青年。彼は肩まで湯に浸かり、満天

の星空を見上げていた。

宿にも備え付けの風呂はあるのだが、そこは風呂専門の店の方がいいというものであるう。

大きな露天風呂に、青年は大変ご満悦な様子であった。

「こいつぁ是非とも、俺の故郷に伝えねえとな」

「……何を？」

と、青年の隣で湯に浸かっている少年が尋ねてきた。
アテルである。

当初、アテルが同行する予定はなかったが、出立の直前になって青年が「ついてくるか？」と問うたのだった。

マリベルは「お役には立たないと思いますが」と言っていたが、最後にはアテル自身が「一緒に行く」と決めた。

そんなこんなで、三人での旅路となっているのである。

「何って、この『風呂』とかいうやつに決まってるだろ。俺が住んでたところにこんなものはなかったからな」

「……ふうん」

相槌を打ったアテルは、やや躊躇いがちな口振りで切り出した。

「ねえ、セリアシュリン様から聞いたんだけど、その……ルイ——さん、は違う世界から来たって、本当なの？」

「ああ、本当だ」

「そう……なんだ」

まさか即答されるとは思っていなかったアテルである。「そう……」としか言いようがなかった。すると青年は、その反応が可笑しかったのか、笑いながらアテルを見やった。

「なに？」

「いや、セリアも似たような反応だったんでな。異世界から来たなんざ、普通は馬鹿げた話だろうに」

「そうかな？ 魔術の中には召喚術つてのがあって、超生物を呼び出す術があるんだけど、その理論を研究してる人の中には、その超生物は実は違う次元から呼び出してるんだってという説を立ててる人もいるよ」

「……説を立ててる？」

「え？ うん」

「じゃあその召喚術つてのは、詳しいカラクリがわからないままに扱えてるのか？」

「召喚術に限らず、それぞれの術に対応した呪文を唱えたら魔術は発動するよ」

「あー」

そこまで聞いて、何やら非常に嫌な予感がしてきた青年である。

「呪文つてのは、魔術を発動させるときに何か唱えるあれのことだな？」

「うん」

「どういう言葉なんだ？ あれは」

「闇の言葉とか、呪いの言葉とか、力ある言葉とか言われてる。正式には呪文エル・エントグリフって言らしいけど、長いから皆呪文じゅもんって言ってる」

「……なるほど」

「手錬の人になると、その呪文を聞いただけでどんな魔術かわかったやうから、大抵は普段使う言葉の合間合間に呪文を組み込んだりする。——こ・ん・な・ふ・う・に」

ぼっ、という音と共に、湯から持ち上げたアテルの右掌に、握り

拳程度の炎が出現した。

「ふむ」

魔術の発動を改めて間近で見た青年は、ある確信を持った。

魔法であれ魔術であれ、魔力を媒介として超常現象を操る技術であることに違いはない。

青年のいた世界では『魔法』は専ら己の体内に宿る魔力を駆使して発動する技術であった。

しかしこの世界ではどうやら、呪文と呼ばれる言葉を用いることで、主に自然界に存在している魔力を駆使して超常現象を起こし、それを『魔術』と称しているようである。

そしてその呪文とやらが、魔力を集め、練り上げ、属性を変換するといった、発動に至るまでの一切の過程を自動でこなしてくれているのである。

術者は間違いないように呪文を唱えるだけ。魔力のことなど、知る必要がないのだ。

全自動の魔法。どうやらそれが、この世界における魔術である。

青年は喉の奥で呻いた。

「これは、いかん。子供に剣持たせるよりいかん」

「え？ 何が？」

アテルは炎を霧散させ、きよんとしている。

そんなアテルを、青年は厳しい顔で見据えた。

「いや、こいつらを責めることはできねえな。呪文みたいな便利なものがあつたらこうなるのは当たり前の話だ。となると、気になるのは呪文を考え出した奴だが……。まあ、それはまた今度でいいか。

とりあえず今は――》

「よし、アテル」

「な、なに？」

アテルは青年の剣幕にやや気圧されながら返事をした。

「お前に魔法を教える」

「……へ？」

青年はそれだけ言うと、風呂からあがっていった。
一人残されたアテルは首をかしげ、

「何？ ……魔法って」

訝しげな声で呟いていた。

それは、影のようであった。

闇の中、大地を這うようにして疾駆する影。

数は複数。

尋常ならざる速さである。

人ではない。

獣か。――否。

暗き闇に紛れその姿形は定かではないが、影から発する禍々しさは、とてもただの獣のものとは思えない。

影は互いに交差しながら、何かを目指しているようであった。

三人は宿屋の一室にて談話していた。

二人とは遅れて、風呂から宿に帰ってきたばかりのセリア。その白い肌は上気し、本人の意思とは関係なく、妖艶さの入り混じった色気を放っていた。

青年は意に介した様子はない。しかしアテルにはやや刺激が強すぎたようで、彼は視線をセリアに移さないよう、必死に青年を凝視している。

「魔法を、ですか？」

セリアが問うた。

「ああ、俺の見た限り、魔法も魔術も原理は変わらん。ただこの世界の魔術師とやらは、魔術を扱ってる割に、知っておかなきゃならんことがわかってねえ。——セリア、お前にも教えるから、アテルと一緒に学ぶといい」

「でもあの、私は」

「何も剣士をやめると言ってるわけじゃない。魔法を体得すれば、お前の剣士としての腕も確実に上がる。それに——今のままだは不服だろ？」

青年は、セリアの剣を一瞥した。

セリアははつとして、壁に立てかけている剣を見やった。

青年の魔力が宿った剣。

確かに強力な力だが、それは自分の力ではない。

言うなれば武器の強さだ。

武人として、力への欲求がないわけではない。

強くなりたいという思いがないわけではない。

ただその力とは、強さとは、単純に強い武器を手に入れて得る力、

強さではない。

だから素直に扱えないでいた自分がいた。
しかし青年は、そんな自分をしっかりと見抜いていた。

「よろしく、お願いします」

「ん」

頭を下げたセリアに、しっかりと頷いて返した青年だった。が、

「ん？」

不意に首を動かして右を向いた。
セリアとアテルも青年に倣うが、そこには壁があるだけである。
しかしどうだ。

青年の目は壁の向こう側、その遙か彼方を見据えているようではないか。

「ルイ？ どうしました？」

いきなり明後日の方を向いた青年を不思議そうに見やるセリアとアテル。

と、青年はすっと立ち上がった。

「何か来るぞ」

「え？」

「敵ですか？」

セリアは反射的に剣に手を伸ばした。

「殺気は五つ。人間のものじゃねえな。獣……でもねえな。何だこ

れは……？」

「全然、何も感じないけど？」

「いや、まだ遠いが、どうやらここへ向かってる。直に来るぞ」

「もしか魔物ですか？」

「さあな、俺は魔物がわからん」

《しかしこの気配……。魔力が狂ってやがるのか……？》

青年はアテルに視線を移した。

アテルは、目を閉じて気配を探ろうとしている。

「アテル、気配は魔力で読むんだ」

「魔力？ 何それ？」

「説明は後だ。セリア、ここには兵士が何かいるのか？」

「魔物やいざこざの対策に、それなりの腕を持った傭兵は雇われて
いると思います」

こういつた街道沿いにある宿場町にとって、何より重視されるも
のは安全性である。

以前は騎士団の屯所があったのだが、先の騒乱以降廃止になった
ため、傭兵を雇い入れるしか方法がなくなったのだ。

しかも、たとえ魔物や野党の類が襲ってきてても、きっちり対処
してくれるだけの腕を持った傭兵を雇わねばならない。当然金もか
かる。

だが金を渋るわけにはいかない。そうすれば結局のところ、自分
たちの身に危険が及ぶことになるのだから。

「魔物つてのは、どういう生き物を言うんだ？」

「一般的には、生態系に異常を来した獣きたを指します」

「……なるほど、たぶんそれだろうな。——で、どうする、傭兵と

やらに任せるか？」

「任せられるならその方がいいかも。僕らはなるべく、目立つような行動は控えた方がいいよ」

「……ええ」

アテルの言うことは最もだが、何もしないというのは気が引けるセリアであった。

この辺りにはそれほど強力な魔物が出現したという話は聞かないため、恐らく大丈夫だと思われるが、それでも人的被害が出ないとは限らない。

「ルイ、気配から強さはわかりますか？」

「お前一人で対処できる程度だが、問題は傭兵とやらがいつ気づくかだ」

「……そうですね」

悲鳴が上がってから駆けつけたのでは遅いのだ。
雇われている傭兵を信用しないわけではないが、万が一ということもある。

「……私、行ってきます」

セリアは立ち上がった。

「じゃあ僕も」

「決まりだな」

「え、いいのですか？」

「放つって誰か死んだら寝覚めが悪いもん」

アテルが言った。

「ルイはよろしいので？」

「良いも悪いも、俺が行かねえとどこから来るかわからんだろ。それに、いい機会だからな」

「何の機会です？」

「魔法を教えるって言っただろう？ 百聞は一見にしかずって言うからな、実際に見せてやる」

十七章 蒼き月の夜

中天に蒼月がかかっていた。

天気、気温、湿度など、様々な条件が整ったとき、月が蒼く光る夜がある。

幻想的、かつ神秘的なその光が大地を照らしているときに生を受けた子供は、将来偉大な事業を為すと言い伝えられている。神姫エルティアが生まれたときも、天には蒼月がかかっていたと伝承にある。

そんな、蒼き月光が降り注ぐ中、彼らは集まってきた。

ある者は義のために。ある者は守るべき者のために。そしてある者は、己が信念のために。

一人、また一人、続々と集まってくる。

各々緊張が見えるが、静かな表情であった。

その目には躊躇いはなく、覚悟があった。

イリウス邸の前は、瞬く間に人で埋め尽くされた。

八百、いや千人はいるだろう。

とそこへ、イリウスが現れた。

彼は紫のマントをまとい、黒馬に跨っていた。

少しばかりざわついていた場が、水を打ったように静まり返った。

イリウスは、集まった者たちを見渡すと、静かに話し始めた。

「皆には今日まで、大変な苦勞をかけた。皆が耐えてきた苦惱は、全てこの、イリウスの不甲斐なさが原因である。よって皆の中には、私に不満を持っている者もいるだろう。しかし、これだけは言っておくが、皆は私の下で戦うのではない」

その言葉に、兵たちは互いに顔を見合わせた。
イリウスは一息つき、さらに続ける。

「我々は、あるお方の下で戦う。その方はすでに、数名の護衛を連れ、敵地へ赴かれています」

すると、ある者が問うた。

「閣下、そのあるお方とはどなたです？」

どのような兵であれ、優れた指揮官の下で戦いたいものである。
彼ら兵士にとって指揮官が采配を誤ることは、自分たちの死に直結するのだ。

「セリアシュリン殿下だ」

どこからともなく、「おおお」という声が聞こえてくる。
皆、まさかその名前がくるとは予想だにしていなかったようだ。
当然だ。セリアがレイザードに帰ってきているということは、まだ一部の人間しか知らない。

「殿下はすでに計略遂行のため、敵地へ赴かれています。しかし、その計略を遂行させるためには、我々はブエティノ卿の軍と正面から渡り合う必要がある。故に、多くの死者が予想される」

イリウスはもう一度、集まった者たちの顔を見渡した。

「家には妻子がいる者もいよう。逃げても責めはしない」

そう言つとイリウスは、静かに暗闇の中に消えていった。

それから時間にして一時間後、イリウスとマリベルは兵を率いてシャトリナを後にした。

総勢千二百名。

たった一名も、逃げる者はいなかった。

青年の手から放たれたのは、雷光とも言つべき青白い閃光。まさに稲妻であつた。

すでに最後の一匹となっていた黒き魔物は、その身を雷光に貫かれ絶命した。

いや、絶命というのは正確ではない。

魔物は雷光に貫かれた瞬間、一瞬で灰となり、吹き飛んで消滅したのだ。

恐るべき威力。

傍で見ていたセリアとアテルは、声もなかった。

特にアテルの受けた衝撃は凄まじかつたらしく、彼は半ば呆然として立ち尽くしていた。

《何、今の……。今のが……。魔法？》

魔術と似たような現象ではあつた。

現に、雷を操る術も魔術にはある。

しかし、違う。

決定的に違う。

力の質が。

そもそも比べることすら愚か。

あえて言うなら神と人。

それほどの質の違い。

魔法に比べたら、魔術などお遊びではないか。

「アテル、大丈夫ですか？」

セリアが、立ち尽くすアテルを覗き込んでいた。

アテルとて魔術師だ。しかもその年齢にしては腕は立つ方である。魔術師というものは皆、己が魔術を扱えるという事実に誇りを持っているものである。

しかし今、青年の魔法を見たことで、アテルの魔術師としての自身は粉微塵に打ち砕かれているはず。

シヨックを受けていないかと、セリアは心配になったのだ。

するとアテルは、ようやく我に返ったようで、セリアから顔をそらした。

「……平気」

わかりやすい反応である。

「まあ、色々言いたいこと聞きたいことあるだろうが、とりあえず宿に戻ってからだ」

こうして宿場町は、まったく知らないところで魔物の襲撃を受けそつになり、そしてまた、まったく知らないところで事なきを得たのであった。

部屋に戻っても、アテルはまだ俯き加減だったが、青年が魔力を見せてやると、興味を示した。

「何、これ？」

青年の手から、溢れるようにして出てくる赤い光の粒子。

「こいつあ魔力カールと言ってな。魔法や魔術が発動する際、媒介となっている物質だ。主に自然界と生き物の体内に存在する。――魔術が発動する際、エネルギーの波動を感じるだろ？ あれは魔力カールが練り上げられてるんだ。つまり、高密度に圧縮されてるわけだ」

「ふうん」

「本来はな、そういった作業はすべて己の意思で行うんだが、俺が魔術を見た限りでは、どうやら呪文とやらが自動でやってくれてる。――何か質問あるか？」

「……魔術と、さっき見た、魔法？ 両方とも魔力カールっていうのを使って発動させるんだったら、どうしてあんなに威力が違うの？」

「魔法や魔術――面倒だからもう魔法に統一するぞ？ 魔法の威力っていうのはな、魔力カールを練り上げた度合いで決まる。呪文とやらは確かに魔力カールを練り上げるわけだが、結論から言うと、あんな程度では練り上げた内に入らん。だから自ずと威力も低くなる」

「その魔力カールは、どうやって練り上げるの？」

「それにはまず、体内の魔力カールを感じ取ることから始めねえとな」

「僕の中にもあるの？」

「アテルにもセリアにもある。それを感じ取ることができたら、世界が変わるぞ？」

「？ ……どんなふうに？」

「それは、できてからのお楽しみだ」

その男は背が低く、でつぷりと肥えた腹が特徴的であった。薄くなつた髪は、彼を実年齢より十ほど年老いて見せている。顔立ちも決して良いとは言えない。

男の名はアルガス・ド・ブエティノ。

カルファラ王国から派遣された執政官の一人である。

彼がどのような政治を布いてきたのか。端的に語るとするならこの二年の間だけで、ゼナンにあつた町村が三つなくなった。

三つとも、滅びた直接的な原因は魔物である。

それも調査の結果では、大して強力でもない魔物によつてである。ブエティノ卿が執政官として最初に行ったことは、軍部の増強であつた。

つまり徴兵である。無論、近隣の町村から。

もともと、それほど大きな町村ではなかつたためお金もなく、住民で自警団を結成して魔物に備えていたところ、徴兵である。後には女子供、老人だけが残つた。

そこへ魔物が来襲すれば、どうなるかは火を見るよりも明らかであらう。

ブエティノ卿は、豪華な造りの椅子に座つて短い足を組み、葉巻を吸っていた。

そのままじつと、暖かそうな赤い絨毯が敷かれている床を凝視している。

とある伝手から一報が届いたのは、つい先ほどのことであつた。知らせの内容は、驚くべきことではなかつた。

予想の範囲内、いつか起こるだろうと思つていたことだ。

「ついに尻尾を出しおつたか」

口元に下劣な笑みを浮かべるブエティノ卿であったが、一つわからないことがあった。

なぜ今なのか。

何か理由があるはずが、それがわからない。

何か、決定的な情報が欠けている気がしてならない。

と。

トントン。

控えめなノックの音がした。

「何用じゃ？」

ブエティノ卿は威厳たつぷりに問うた。

しかし、実は本人が思っているほど声に威厳は感じられないのだが、そんなことは些細なこと。

「は。バルト騎士団隊長、ライン殿がお見えになっておりますが、いかがいたしましたしょう？」

「ふむ……」

恐らく例の件の返事だろう。

団員を半数にせよという。

バルト騎士団の団長は一筋縄ではいかない男。

さて、どのような返答がくるやら。

いや待て、

ブエティノ卿は何かを思いついたように、口元にやりと下品な笑みを浮かべた。

そうだ、それがいい。

我ながら良策だ。

そうと決まれば準備をせねばなるまい。

「少し待たせておけ」

込み上げる笑いに口元が緩むが、それを抑えて威厳たつぷりに言う。

「ははっ」

扉の向こうから、足音とともに気配が遠ざかっていった。

「さて、忙しくなるわい」

これからのことを想像するだけで、込み上げる笑いがとまらないブエティノ卿であった。

ラインは舌打ちしていた。

予定よりも到着が遅れてしまったのだ。

しかし、不機嫌を表に出すことはなく、バルトの紋章が刻まれたマントをなびかせ悠然と歩く。

城に詰めている兵士たちが、ラインのために道を開けていく。ブエティノ卿に仕えてはいるが、どうやらバルトの騎士に関しては一

目置いているとみえる。

ブエティノ卿の居城は、雅で華やかな城というわけではない。もともとは戦いのために建てられた石造りの城である。いざというときには、立て籠もることもできる。

無論、外壁もすべて石造り。進入路は南北に二箇所ある門のみである。

「こちらでお待ちください」

兵士にそう言って案内されたのは、客室の一つであった。さすがに客室だけあって、高級感溢れる一室である。

ラインは腰から剣を外すと、手に持って椅子に腰かけた。

「水を一杯くれ」

「は、すぐに」

兵士は一礼すると、部屋から出て行った。

しばらくして、先ほどの兵士が戻ってきた。

水の入った杯を手渡され、ラインはそれを一気に飲み干す。

「ふう。すまん」

ラインは空になった杯を渡した。

「いえ、主はすぐに参りますので、もうしばらくお待ちください」
「ああ」

兵士はまた一礼し、部屋から出て行った。

五分……十分が経過した。

ブエティノ卿はまだこない。
あえて待たせるといふのは、貴族が威厳を保つためによくとる方法である。

文句を言っても始まらない。待つしかない。
ラインは静かに息を吐いた。

ラインの頭に浮かぶは、先日のイリウスとの対談であった。
イリウスは、あの方を王にすると言っていた。
しかし現状は、あの方に関しては居場所すら知らない。実際のところ、生きているのかすらわからないのだ。

だが、二年前あの方を国外へ逃したのはイリウスに他ならない。
適当に逃したわけではないだろう。何かしらの手を打っているはず。

イリウスなら、いつあの方が帰ってくるかも予想がついているかもしれない。

イリウスが動くときは、あの方が帰ってきたとき。
これは間違いない。

「……」

それにしても遅い。
一体何をしているのか。

ラインは立ち上がろうとした。
が。

「むっ！」

刹那、視界がぐわんと歪んだ。

「な、んだ……？」

バランスを崩した身体を支えられず、ラインは床に倒れこんだ。

何だ、これは？

何がどうなっている？

「ま、さか……毒、か？」

なぜ？

自分はたかが騎士団の隊長に過ぎない。

そんな者を毒殺したところで、一体何になる？

何のために？

必死に考えるが、思考が回らない。

壮絶な気だるさと、全身が鉛のように重たい。

《すまん、イリウス……》

それを最後に、ラインは意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6997h/>

魔皇伝

2011年1月23日05時24分発行